
恋するひな子先生

有坂りさこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋するひな子先生

【Nコード】

N2034F

【作者名】

有坂りさこ

【あらすじ】

美人でやさしい小口病院のひな子先生。そんなひな子に憧れる、妹の同級生・木村くん。八歳の無謀な年の差恋愛にやる気満々の木村くん。一方、引っ込み思案で内気な性格の妹・千佳。初恋の相手・木村くんが、きれいすぎる姉にどんどのめりこんでしまい……。傷ついた二人の同級生、そして26歳の美人女医・ひな子の恋の行方は……？18歳の初えっちです

第一話 爆乳女子高生（前書き）

田舎高校生と美人女医の禁断の恋——女医姉妹をめぐる二人の男子
子高生のはげしくも悲しい恋の物語、全編方言でお楽しみください
ね>（——）<

（後半、ちょっとリアルにエッチなので、R-15でお願いします

……m（——）m（

第一話 爆乳女子高生

雲ひとつない青空が、痛いほどまぶしい。

澄んだ湖面に踊る光たちのダンス、ロビーのテレビから聞こえてくる甲子園の中継――

まぶしいな……

緋菜子^{ひなこ}は、思わず目を細めた。
でも、それももうすぐ終わり。

いたずらな風が、長く伸ばした栗色の髪をそつと撫でてゆく。

白衣の裾をひるがえし、ロビーに背を向けるようにして踵^{かかと}を返す。

高原の夏は、はかなく短いもの。

そう、いつだって――そんな思いに心がゆれた。

でも、確かに私にもあった。

短いけれど、輝いていた季節が――

大きな雲が一つ、緋菜子の頭上を通り過ぎていった。

一雨くるのかしら――

そんな予感が、胸の奥で疼いた。

* * * * *

キーン、コーン、カーン、コーン……

終業のベルが、一日の終わりを告げる。

清掃用具を手に、あわただしく教室を歩き交う生徒たち、開け放たれる校舎の窓――

でも、ボクはノートパソコンを開いてキーボードをパチパチ……

『こんにちは、ご主人さま♪』

かわいい声でボクに呼びかける自作のドットキャラ（声：初音ミク^{はつね}）。

ああ、なんてかわいいーんだろう……。――

ボクの名前は、浜ミキオくん。

県立・諏訪湖畔^{すわこはん}高校三年生。

趣味：パソコン、特技：パソコン、好きなもの：パソコン。

通称：メガネくん。

将来は、国立の医学部に入って、医者になるだよ。

そのためにも、初音ミクの声でボクを励ましてくれるドットキャラのプログラムを完成させないと……

ああ、ドットとか、まだ萌える。

ここんとこをこーして、もっとあーすれば、うーんと……

キーボードを弾く指が加速する。

画面に踊る全称量化子（↑これのこと）、美しく完璧なアルゴリズム――最高に論理的だ！

「おえおえ、メガネ。おめ、またドットさんに話しかけてるだか？」
背後に感じる不快指数120%のダーク・オーラ。

ああ、振り向かないでもわかる。

マウスを握ったまま、固まるボク――

「おめもよ、メガネ、もつところ、大人になれよな、大人に」

おかまいなしに、非論理的な説教をくりひるげるコイツの名前は、
木村拓夫^{きむら たくお}。学校にまでバンダナしてくる恥ずい奴。ハッキリ言って
最悪。

「おめ、パソコンっていったら、アダルトずら、アダルト」

カチッ

バンダナの手がマウスに伸びた。

桃色一色に染まるバイオ（SONY）の画面――

高画質液晶ディスプレイに映し出されていたのは、デカ乳を揺らしながら、アンアンと腰を振るお姉さんの動画……。

「いーじゃん、いーじゃんよ、メガネ！」

興奮もあらわに絶叫するバンダナ。

「ほう、見るや、見るや」……

くっそおー、なんでこんなバカな奴が、この学校にいるだ？

クロ●ティー高校とか行けっつー！！

届かない心の叫び。

ハア、周囲の冷たい視線が痛い……。

「ちよつと、あんたたち」

どこからともなく投げかけられた低い呟き。

声のする方向を目で追うボクとバンダナ――

「そんなところでサボってないでさ」

人垣の向こうからのそつと姿を現した声の主。

おかっぱ頭にガリ勉メガネの女の子――手に塵取りと箒を差し出して！！

「そーじ、してよ……ね……？」

地の底から響くような低い声――分厚いレンズが鈍色に光った。

そのまま塵取りと箒を押しつけられたボクたちは、思わず半歩、後ずさった。

「じゃ、たのんだね」

彼女は、何事もなかったように、スタスタとその場を離れてゆく。

「おえーっ、オレは忙しいだぞ、小口おぐちイイイー！」

むなしく響くバンダナの声。プツ、いい気味。

「ったく、小口って奴は面白みのねえ女だよな、メガネ。あれでも

女子高生か？」

なれなれしくボクの肩に手をかけるバンダナ。

「別にイ、まちがったことは言っていないし」

思わず顔をそむけるボク。あー、ウザイ、どっか行ってえーつつ。

「でもよオ」

バンダナは遠目に小口さんを覗いながら、ボクから身を離れた。

「いー乳してるよな、小口って」

ハアハアと、よだれを垂らさんばかりのバンダナ。

キミって奴は、それしかないただか？

ボクは心の中でため息をついた。

とまあ、こんながボクのハイスクール・ライフです。

はあ、バンダナの奴、少しは静かにしてくれないただか……。

そんなことを考えながら、高島城公園のベンチでプログラムの続きを打ちまくるボク。

おっと、そろそろ予備校の医進ゼミの時間だ――

三角屋根の時計台で時間を確認して、パソコンを閉じようとした、その時だった。

不意に視界に飛び込んできたピンクのスニーカー。

「んっ？」

ボクは伏せていた顔をあげた。

ちようど、その位置に突き出たガラス状の物体――

「ぶはらっつ！ー！？」

ボクは思わずのけぞった。

なに、この板ガラス！！ てか、メガネ！？

「あ、あのさー……」

男だか女だかわからない、低くかすれた声。

そこにあったのは、間近に迫る小口さんの顔。

てか、気配ないの、この人！？

ガラスの奥の瞳が、じろつとボクを見つめていた。

「お、小口さん……ど、どーしただ？」

ボクは力サカサと後ずさりながら、どうにか言った。

「べ、別に……ただ……」

小柄なボクを覗き込むようにして、小口さんは上体を前にかがめた。

そしてボソツと言った。

「い、医進ゼミ、早くしないと遅れるだよ？」

「へっ？」

ボクは間の抜けた顔で答えた。そして、しばらく視線を泳がせる。

うつうつ……！！

視線の先にあつたもの——くつきりと浮き上がった小口さんの

胸の谷間——

「……………っ！！」

ボクは固唾を吞んで、それを見つめた。

いけない、そんなとこ凝視してちゃ……。

でも、目が釘付けに——

「あ、あのお……」

ボクの視線を知ってか知らずか、小口さんの顔は紅潮していた。

互いの胸がドキドキする。

ヤバイ、このアングルはまだで……

「じゃ、じゃあ、私、先に行ってるから……」

気まずい雰囲気をやぶるように、彼女はかがめていた身を起こした。

たふたとした二つの塊が、ぽよんとゆれた。

胸元にしんだ汗が、谷間に吸い込まれて、消えた。

み……見えた……

興奮と感動——ボクは奇妙な幸せにふるえていた。

小口さん……

心の中で彼女の名前を呼んでみる。

そんなボクを、避けるようにして通り過ぎてゆく通行人——
はは、ボクは変質者じゃないってば（どうだか？）。

夏も終わろうとする八月下旬——

生まれて初めて三次元の女体に目覚めたメガネ君くんだった。

第1話 終

第一話 爆乳女子高生（後書き）

どこまでものどかな、諏訪盆地の一日でした
次回、小口さんのお姉さんが野獣バンダナに目をつけられて……？

第二話 小口さんちのきれいなお姉さん（前書き）

地味で存在感のない同級生・小口さん。その隠れ巨乳に幻惑された
メガネくんは……。

第二話 小口さんちのきれいなお姉さん

その晩、家族が寝静まった頃を見計らって、ボクはパソコンを立ち上げて、小口記念総合病院のホームページを開いた。

諏訪湖のほとりに建つ、白くてきれいな大病院——それが小口さんの実家だ。

将来、勤めるなら、こーゆー新しくてきれいな病院がいーなー。そんなてきとーな未来図を思い描きながら、院長一家のプロフィールを開いてみる。

「……出た」

冒頭にあらわれたのは、小口さんの両親の写真——

ふうーん、これが小口さんのお父さんとお母さんかぁー……ケッこーふつーじゃん（オイオイ）。

なになに、

- 病院長 小口善太郎（京都大学医学部卒）

- 院長の持論 副作用をきちんと伝える服薬指導が……

どーでもいーや、次。

カチッ

次に出てきたのは、若いイケメン医師。

- 長男 小口史明（東大医学部卒、同大医学部附属病院勤務）

- 博士課程学位取得論文『ハンタウィルス肺症候群のナントカ

……」

す、すげー、諏訪盆地から東大理3スか！？

画面をスクロールさせると、そこには、髪を背中まで伸ばしたきれいな女の人の画像が——だ、だれ！？

- 長女 緋菜子（ひなこ京大医学部卒、当院勤務）

うつわー、すっげー美人……モデルさんか何か！？

『ひな子先生より』と題されたコラムを読んでみる。

なになに、「小児科医の感染症に対する関心は、以前よりもかなり薄れています。ベロ毒素をもつO157は、かつての……」

むずかしいんで、パス。

で——ここからが肝心なところなんだけど、小口さん本人のプロフィールって、どうなってるんかやあ？

ボクはドキドキしながらページをめくった。

カチツ

- 次女 千佳（ちか諏訪湖畔高校3年生

——って、コレだけえ？

ンなアホな——っ！？

ムダな努力と知りつつも、スクロールバーをスライドさせまくる

ボク——

な、なんなんだ、この差別待遇は！？

それとも秘密主義者！？

「くっそおおおお——っ」

思わず叫び声をあげるボク。

それに呼応して一斉に遠吠えを始める近所の駄犬ども——

「うるさいだよ、ミキオ！！ いま何時だと思ってるだ！？」

ハア、親まで起き出してきて、もお最悪……。

けっきょく、眠れない一夜を明かしたボクは、割り切れない思いを抱えたまま登校することに。

ハア、このずしつとくる徒労感……。

「よお、メガネ、ちょー、見ろや、見ろや！」

朝っぱらからテンション全開のバンダナ――

ハア、これだでバカは悩みがないとか言われるだわ。

「ほう、メガネ、いーもん見せたるでな、ほう、ほう」

ったく、メガネ、メガネって、人のことを何だと思って……

ムカっ腹が立つのを抑えながら、ボクは手渡された写真週刊誌を開いた。

――現役スッチー・B95の衝撃フェロモン“私、脱いでもすごいですッ”――

「のわ――っ、フ・イデエー!？」

よせばいいのに、媒体名を口走ってしまうボク。

「やだー、白昼堂々、フ・イデーだよおーっ」

「うっそー、エロッ」……

クラスの女子の白い視線――軽蔑の眼差し。

「ほう、いいいら？ 目の保養ずら？」

カラカラと笑うバンダナ。おかげでボクはいい迷惑だ。

ハア、どこまでKYなんだ、このバンダナは……。

でも、今日のボクには、この品性下劣な野獣を飼いならす絶好の切り札がある。

それでうまいことバンダナの目をそっちに引きつけて、あとはうまいこと……うふふ。

「そ、それよりも木村くん」

ボクは、機嫌を取り結ぶような口調で、バンダナにすりよった。

「あん？」

「ここに貴重な資料があるんだけど、見る？」

「見る見る、見るに決まってるだねーか、メガネ!!」

思わせぶりなボクを床に突き飛ばし、バンダナは資料をもぎとった。

「ほう、貸せ!!」

「だあほ!？」

もんどりうつて倒れるボク。

荒い息づかいで不気味な笑みをたたえるバンダナ。

鬼!! 悪魔!!

「こつ、これはあつ」

奪い取ったそれを見て、ケダモノじみた声を上げるバンダナ。

「誰だや、このゲロマブいお姉さんは!？ おまけに白衣って、超フエチちゃん？」

時代感覚ナツシングの死語攻撃を連発するバンダナ。

「いいですか、木村クン」

得意げに説明を始めるボク。

「この写真の人は、小口さんのお姉さんの緋菜子ひなこさんですよ」

「お、小口のねーちゃん!？ に、似てねえ……」

あまりのギャップに絶句するバンダナ。

スラリと伸びた長い手足、サラサラの栗色の髪、まつげの長いパツチリとした二重ふたえの目、そして肉感的な唇――

どこか物憂げな表情が、本当にきれいで……。

ボクたちは、改めて緋菜子さんの写真に見惚みとれた。

「んっ？」

バンダナの目が、教室の出入口に向けられた。

入ってきたのは、小口さん――グレーの横縞が入った無造作なシャツが、とにかく地味だった。

無言のまま席につこうとする彼女を、能天気なバンダナの声が呼び止めた。

「よー、小口!」

立ち止まった彼女は、ぎこちない素振りで、ゆっくりと振り返った。

「な、な……何の用、木村ク……ン？」

全身をこわばらせ、どもりながら訊ねる小口さん。

「昨日は、そーじサボって悪かったな」

心にもないウソを爽やかに口にするバンダナ。

「ま、おめはまちがったこと言ってるんだから、気にすんなや。な
っ」

「う……うん、わかった……」

てか、気にするのはオマエ自身だろ、バンダナ……。

「まったく、誰にでもすぐ色目使うんだから。やだやだ、お調子者は。
」

バンダナは切り出した。

「この人、おめんちのねーちゃんずら？」

ボクが印刷した緋菜子さんの写真を見せながら、バンダナは言った。

「いやー、小口。オレ、実はよォー、医者めざしてるんだわ」

バンダナは、妙なポーズを作りながら宣言した。

「な、な、なんだ、コイツわーっ！？」

「おめんち、病院ずら？ いちど見学してもいいかや？ できれば、
おねーさんにも取材を……」

うげえーっ、バンダナ、おめ、文系ずら？

小口さんは黙っていた。

おかまいなしに、一方的に話を進めるバンダナ。

「なっ、小口？」

「別にいいけど……」

小口さんの表情に翳^{かげ}がよぎる。そのさみしげな唇が、小さく動いた。

「でも、ウチなんか、やめたほうがいいよ」

「えっ」

思わず固まるボクとバンダナ。

「じゃー……ね」

そう言つと、彼女は静かにその場を離れていった。

フウ、何はともかく作戦は予想通り大成功。

緋菜子さんという餌に食いついた、バンダナという名のドブネズ

三――

ボクはそれにくつついて、小口さんの実家をあやしまれずに見て歩くことができる。

あわよくば、緋菜子さんの前で、このドブ人間の化けの皮をはがして、小口さんからバンダナの奴を永遠に隔離する――すばらしい。

ボクは内心でほくそ笑んだ。

でも――ボクは思った。

ウチなんか、やめたほうがいいよ――彼女のあの言葉。

彼女が見せた最後の表情――それが少し気がかりだった。

第二話 終

第二話 小口さんちのきれいなお姉さん（後書き）

きれいな緋菜子先生に夢中のバンダナ。でも、メガネくんは、小口さんの表情が気になって……。

【りさこのお知らせ】天才美少女エステルをめぐる奇妙な事件を描いた『エステル・アシュケナージの冒険』、今日で最終回です。ぜひご覧になってくださいね m () m (0 8 / 1 0 / 0 5)

第三話 花岡先生のパンツ（前書き）

意味深な小口さんの言葉。それが少し心配なメガネくんですが……。

第三話 花岡先生のパンツ

「——まっ、いーかつ」

バンダナは、唐突に体を動かし始めた。いやに陽気なそのしぐさ。

「これで、小口^{おくち}んちのねーちゃんに会えるだよ。放課後が楽しみだぜえ！？」

周りの人は、英語の構文を暗記中——集中力、乱されまくり。

「なんとかしてよ、コイツ」

「ちよつと、静かにして、バンダナ」……

そんな非難も、このKYの耳には届かない。

教室の入口付近で、意味のわからないシャドウ・ピッチングを始めるバンダナ。

授業前だつてゆーのに、まだ勘弁だお……。

ふりかぶつて、投球モーションに入ろうとした、その時だった。

ガラッ

引き戸が開いた。

ちらつと覗くグレーのスーツ。

そこに飛び込む、松坂になりきったバンダナ——

「キヤアアア——！？」

「ぐばあ！？」

グシャア

悲鳴と怒号が交錯し、ぶつかつてもつれあふ二人の人影……

「きつ、木村クン！？」

ボクはあわててバンダナに駆け寄った。

「バ……バカだねえ、キミって……」

思わず本音。

「つてえーなー、ブツ殺されんぞ、テメー……」

よるめきながら、相手の顔をにらみつけようとするバンダナ。次の瞬間、そのマヌケ面がいつそう醜悪に引きつった。

「はっ、花岡ちゃん!？」

バンダナは、半歩後ずさつて、ぶつかつた相手の名前を叫んだ。

「いったーっ、もおっ、木村クン!? 何が花岡ちゃんよ!？」

左腕を抑えながら、そこに尻もちをついていたのは、ウチの担任はなおか ゆきこの花岡由記子先生。

いかにも独身つて感じの26歳の英語教師。

「どーでもいーけど、木村クン。あなた、放課後、補習すら?」

黒の出席簿でペシペシとバンダナの腕を叩く花岡先生。

「そ、そげなー」

哀願の目を向けるバンダナ。

「じゃ、受動態の分詞構文のとき、ちゃんと復習しとくだよ?」

「きしょオー、鬼ババ!! 鬼畜!!」

ベシベシ!!

間髪いれず、花岡先生の出席簿が、バンダナの頭に炸裂。

「いつてええー、訴えんぞ、ブス!! 平成教・委員会とかによオ

ー」

頭を抱えるバンダナをよそに、ボクは目を皿のようにして、一連の光景に見入っていた。

そう、見えちゃったのだ!!

さつき、床に尻もちをついた時、は、は、は、花岡先生の、パ、

パ、パンツ――……!!

「ピンク……だったよな、メガネ?」

「なんのことだい、木村クン?」

しれつと無視するボク。

「しかし、あんな地味系ガチガチ女に欲情するなんて、おめもマニアだな、ぷぷっ……」

さりげなくボクの内心を代弁するバンダナ。

おまえわエスパーかーっっ!?

「ち、違……ちょおっ……!?!」

真っ青になって否定するボク。

「やだー、年増^{としま}好み?」

「朝っぱらからフ●イデーだし……」

どよめく周囲の女子たち……

お、終わった、完全に。

「ま、いーだ、メガネ。放課後、おめも小口んちにつきあえ、なっ?」

「あんたわ補習だつて言つたずら!?!」

ピシピシ!!

聞き分けのないバンダナに、花岡先生の指示棒が炸裂。

何度いえばわかるんだ、コイツ……。嘆息だね。

でも、すごかったなあ、花岡先生のパンツ。

生まれて初めて見ちゃったよ、女の人の生パンツ……。

それに、花岡先生って、年の割には若い感じだし、身なりもおとなしいし……。

「じゃ、with (for) allの構文から——これはin spite ofによつて——」……

ああ、ボク、本気でけっこう好みかも、花岡先生。

そんな先生の板書姿を見ながら、ボクは心の中で呟いた。

うつすらと瞼に浮かぶピンクのパンツ、それに白い太もも——

その付け根が妙に気になっちゃったりして……。

ああ、どんなふうだったかなあ、花岡先生のあの部分って——

あのシーン、しっかりと目に焼き付けておかないと——

淡い幸せのうちに、そう思った。

第三話
終

第三話 花岡先生のパンツ（後書き）

これも淡い性の目覚め？ 花岡先生のパンツが忘れられない、メガネくんでした。

次回は、二人で小口病院へ。美人のひな子先生に、バンダナは……？

第四話 美人の女医さん（前書き）

放課後、小口病院を訪ねることに決めた二人。お目当ては、もちろん美人のお姉さんです！

第四話 美人の女医さん

んでもって、放課後――

「おい、メガネ、遅いだぞ！！　ほう、飛んでこお、飛んで！！」
人のことを20メートル先から大声で呼びつけるバンダナ。

ボクは息を切らせながら、ようやく小口記念総合病院のパーキング前へと転がり込んだ。

「ったく、補習バツクレんにや苦労しただよ、ははは。見ての通り、血んどろ真っ赤だよ」

体中に生傷を作りながら、バンダナは頭をかいだ。

うわ、強盗でもしてきちんぢやねーの、コイツ？

別に明日でも明後日でもかまわねーだろーがよ――そう思ったけど、今は呼吸をするのが先決だったので、言うのはよした（言ってもムダだけど）。

ま、愚かなバンダナを利用して、ボクも小口さんに急接近だ！！
さっそく、正面玄関に回り、エントランスホールへと進むボクたち――

ほぼ一通りの診療科がそろっている白亜の大病院――にわかに不安げな表情に変わる庶民出のバンダナ。

「なあ、オレただで勝手に見学していいーだか？　不法侵入ずら？」

「いちいち誰も気にしてないですよ」

嘆息するボク。

まったく、妙なところで小心者なんだから……。

総合案内のブースには、きれいなお姉さんが二人も立っていた。

まるで空港のロビーのように混雑する受付窓口――

「それにしても、大きな病院ですね」

ボクも思わずあたりを見回した。

「小口って、いーとこの嬢ちゃんだっただな」

いくぶん気後れするようなバンダナ。これだから貧乏人は……（
って、ウチの実家もただの床屋さんなんだけど）。

「……やっぱり来たのね……」

「わっ」

聞き覚えのある声に、ボクたちは思わずのけぞった。

「見学するなら諏訪日赤にでもすればよかったのに」

そこにあつたのは、どよおんとした小口さんのたたずまい。

「お、小口！！ や、やあっ」

バンダナの声が上ずる。

「だけど、勉強になりますよ」

ボクはつとめて平静を装って言った。

「ボクも将来は、こういう大病院の勤務医を目指してますから」

「浜くんならなれるよ、きつと」

小口さんはそう言ってくれた。

わーい、作戦通り、完璧に株を上げただよ！！

そんな謀略を知ってか知らずか、バンダナはキョロキョロとあたりを見回していた。

この田舎者……

「あら、千佳^{ちか}。お友だち？」

しつとりとした大人の女性の声——語尾にただようかな吐息の余韻が切ない、そんな——

「そ……そのお声は、まさか！？」

本命の登場に、キラキラと目を輝かせるバンダナ。

「はじめまして。千佳の姉の緋菜子^{ひなこ}です。いつも妹がお世話になっているみたいで……」

「ひ、緋菜子お姉さまだーっ！ー」

まるで芸能人でも見つけたかのようなバンダナのリアクション。

でも、無理もないと正直に思った。

周囲の視線を一身に集める緋菜子さん——

患者もナースも、ドクターも……みんなが緋菜子さんを振り返る。

本当にきれいだった。

黄金色の日差しの中で、はにかんだような控えめな笑顔が輝いていた。

みんなの人気者、やさしくて頼りにされている——そんな感じがまぶしかった。

「はじめまして」

バンダナは、勢いよく前に出た。

「ボクは千佳さんの同級生のキムタクこと拓夫たくおッス!!」

「ボ……ボクは浜……ブツ」

ボクの自己紹介を容赦なく遮るキムタク……じゃなくて、バンダナ。

「ふふっ、知ってるわよ、二人とも」

緋菜子さんは、くすつと微笑んだ。

「元気が取り得の木村くんに、将来、お医者さんを目指している浜くんでしょう？ 私、千佳のことなら何でも知ってるんですよ？」

そう言っ、緋菜子さんは目を細めた。

そんな緋菜子さんの前で、小口さんは無言のままうつむいていた。たしかに、このお姉さんと比較されるのはつらいよな……。

ちよつとだけ、小口さんの気持ちが変わったような気がした。

「へえーっ、仲いいんですね、お姉さんっ。うらやましいっス!!」

ひたすらヨイショ攻勢のバンダナ。何がどう羨ましいんだか？

そんなバンダナにも笑顔を絶やさない緋菜子さん。大人だよな、ホント。

顔面にエレキバンを貼り付けたおばーちゃんが、車椅子でキコキコと通りかかる。

「ひな子しえんしえいは、いつ見ても本当にきれいだなやあー」

「ほうだねえ、おばあちゃん」

そんなナースとの会話が聞こえてくる。

緋菜子さんは、気恥ずかしそうに会釈を返していた。

「じゃ、私はこれで。ゆっくりしていつてくださいね」

そう言つと、緋菜子さんは小口さんの肩を抱き、「あなたもがんばるのよ」とやさしく声をかけた。

「緋菜子さんも、お仕事がんばってくださいねーっ」

調子に乗つて、なれなれしく手を振るバンドナ。

しかし、あんな教養のかけらもねえ、高校生のガキを相手にするほど、医者は暇じゃないだよ。やーい、バーカ、バーカ（boyメガネ）。

まさにボクのいい引き立て役って感じぢゃね？ フッフッフ……

第四話 終

第四話 美人の女医さん（後書き）

誰からも好かれるやさしい女医さん、ひな子先生。そんな女医さんにぞっこんラブ（死語）のバンダナですが……。

次回、小口姉妹のプライベート。千佳のいけない趣味が発覚！？

第五話 千佳のえっちな秘密（前書き）

美人で、その上に控えめな性格の緋菜子先生。バンドナの一方的な好意は増すばかり……。

第五話 千佳のえっちな秘密

小口病院に緋菜子さんを訪ねた翌日のこと――

「メガネー、メガネー、メガネ――！！！！」

20メートル先から聞こえてくる、耳障りな声。

「だーっつ、人を気安くメガネって呼ばないで下さいよーっつ！

ボクにも基本的人権ってモンがね……」

「うるせーだ、メガネ！！ それよりも」

ボクの訴えは完全無視、バンダナは一方的に要求をぶちあげた。

「おめの自慢のパソコンで、緋菜子さんにまつわる情報を丸裸にするだーっ！！」

「できねーよ、ンなモン。80年代の少年マンガの見すぎ、見すぎ」

ボクは、面と向かってバカに真実を言っただけだった。

そんなクラッカーみたいなこと、できねえっつうの。

「テ、テメー、メガネえええーっつ、人の足元を見やがってえーっつ！！！！」

わめくだけわめいて何もできないバンダナ。これだで文系は……。

「キミねエ、基本的にもっと頭つかったほーがいーだよ？」

「うるせーだ、メガネ！！」

たく、のび太か、コイツわ？ ボクはド●えもんじゃないだよ？
仕方なく、ボクはバンダナを連れ出した。

「――で、どこだ、ここ？」

不安げな眼差しを向けるバンダナ。

「進路指導室ですよ！！ そんなことも知らないで、何が医者めざしてるだか……」

ボクはため息をついた。

こいつ、バカでしょ？ バカぢやなくね？

「緋菜子さんはウチの卒業生だで、古株の先生に聞けば、何か知ってるずら？」

言いながら、ボクは指導室の引き戸に手をかけた。

「緋菜子センパイ……うーん、えっちな響きだ」

わくわくを抑えきれないバンダナ。そのうち、興奮して死ぬんじゃないの、この人？

「失礼します。宮沢先生、ちょっとお伺いしたいことがあるんですが——」

「おう、浜ただか」

うるさ型の国語科主任・宮沢先生。

頭がバーコード化しつつある、いかにもって感じの進路係。

「チーッス、一部の木村ッス」

（諏訪語脚注Ⅱ「一部」というのは、要するに「一組」ってこと）
「なんだ、おめえ。ハチマキなんかしやがって。ざけんなよ？」
遠慮会釈ないオジサンのツツコミ。

「プ……ププッ……ハチマキだつて、ハチマキーっ」

「てっ、てめえ！！ 歯を見せんや、メガネー！？」

向きになって否定するバンダナ。いや、ハチマキでいや、こんな奴。

「ところで先生、この写真の人なんですけど——」

気を取り直して、ボクは緋菜子さんのことを訊いた。

「んっ、誰だこりゃ？ 俺は知らねえだぞ？」

にべにもない宮沢先生の返事。

「そっ、そげなーっ！！？ うそっしょ？ うそつて言え、コラー——」

荒れに荒れまくるバンダナ。でも、どこ吹く風の宮沢先生。

「それにしても、どえらい美人だねーか。まさか、お医者さんプレーの子だか？」

「おかしいですね。ウチのOGで小口緋菜子さんっていうんですけど」

「小口病院の緋菜子？」先生の声のトーンが変わる。

「そりゃ、おめえ、俺の教え子だ」

「なにイイイイイー!?」
にわかに興奮し始めるバンダナ。
「いい加減なコトを言うなあ!!! さっき、知らねえって言ったず
ら、チュルン!!!」

髪型が →

「だまれ、ハチマキ!!! ここに当時の卒業アルバムがあるだ!!!」
「とつとと貸すだーっつ!!!」

差し出されたそれを、もぎとるようにして奪い取るバンダナ。

「コ、コイツ、なんて自己中な……」

宮沢先生は内心で思った。(内申書、見とれよ?)

ボクたちは、むさぼるようにして『思い出のアルバム』のページ
をめくった。

「うっ……うそお!?!」

問題のページを見たボクたちは、思わず目をうたがった。

「ひ、ひ、緋菜子さんだけ、写真がねええーっつ!!!?」

そうだった。

アルバムは集合写真ではなく、一人一人の個別写真だった。

いちばん肝心な緋菜子さんの写真——なぜか、そこだけが真っ
白になっていた。

「てっ、てめえ、切り取って持ち歩いてるだな、チュルン!!!?」

「人聞きの悪いコトを言うな!!! ただの欠席だだ、欠席!!!」
向きになって反論するチュルン。

う……あ、あやしー……。

「てめー、コラー、他になんかあんだろ? オレの緋菜子は、お目
めパツチリで、唇だってポヨンだわあー!!! そんでもって、年下
好みだだーっ!!!」

「なに言ってるだか、コイツは」

呆れ顔でボクと顔を合わせる宮沢先生。まったく同感です。

「小口緋菜子は、そりゃあ、頭のいい生徒でな。たしか、生徒会の

役員をしてただわ。仕事はよくできたけど、ちょっと、こう、張り詰めたところのある生徒だっただな」

「ウソをつくなあー、オレの緋菜子は、明るくて気さくで、男に従順なんだあーっ!」

勝手な空想をわめきちらすバンダナ。

コイツの頭の中って、今でも封建時代なんだろうーな、きっと……。ボクはアルバムをめくりながら、ため息をついた。

その時だった。

見覚えのある顔写真が、ボクの視界に飛び込んできた。

「あれ、もしかして、この写真の人って……」

「おお、忘れとった」

先生が上からアルバムを覗き込む。

「そうそう、彼女も小口の同級生だっただな。いつも二人いっしょで仲良しだったぞ」

「へえー」

ボクは意外な発見にちょっとした感動を覚えていた。

バンダナは一瞥しただけで、どーでもいーやって顔だったけど。

「それはそうとして、ハチマキ!」

宮沢先生の目つきが変わった。

「おめ、成績最悪だぞ!? わかつとるのか?」

「うっっ」

「おめさんみたいなのはなあ、クドクドクドクドクドクドク……」
延々と続くお説教。

「いい子になりますからあー、だから許して——」

そんな叫びが、むなしく進路指導室に響いた。

ハア、うちの県ってホントに有名な教育県だとか?

* * * * *
* * * * *

湖畔通りに面した小口記念総合病院を、清らかな夜の帳が訪つていた。とほり おとな

湖畔に浮かぶ無数の灯——美しい諏訪湖の夜景。

ひとけ人気の絶えた院内の廊下、一人で入院棟を巡回する緋菜子に、松葉杖の中年男性が声をかける。

「ひな子先生、おつかれさまだな。いつ見てもかわいいーね」

「お大事にね、小林さん。おやすみなさい」

そんな他愛のない会話——平和な一日の終わり、その心地よさ。緋菜子は患者の背中をそっと見送った。

院長一家の居宅は、病院からすぐの古い一軒家だった。

湖畔に面した二階の一室——それが、大学受験を来年にひかえた千佳ちかの勉強部屋だった。

スタンドの明かりが、机の上を白く照らし出していた。

まだ何も書き込まれていない大学ノートの罫線、真新しい参考書

——焦燥感。

千佳は、一つ小さなため息をついた。

写真立てを引き寄せ、修学旅行で撮った思い出の写真を手にとってみる。

クラスで撮った集合写真を除けば、自分の映っているのはこの一枚だけ。

それを写真立てに入れて、時々ながめるのが好きだった。

室生寺むろうじで撮った一枚の写真——私は後ろにちっちゃく映っているだけ。

でも、それでよかった。

前に大きく身を乗り出しているのは木村くん。

そして、横で頭をつかまれているのが浜くん……。

ガチャ

ノブのまわる音がして、部屋のドアがかすかに開いた。

とつさに写真立てを伏せ、ノートの上に参考書を広げる。

「千佳、入るわよ？」

緋菜子ねえさんが、隙間から顔をのぞかせる。

「う……うん……」

私の返事を確かめると、お姉ちゃんは、にこっと微笑んで、私の後ろに立った。

「今、何かかくさなかった、千佳？」

「う……うん、なんにも……」

とつさにウソをつく。

緋菜子ねえさんは、それ以上、何も訊かなかった。

黙々と生物の問題を解く私——お姉ちゃんは、長い髪を揺らし、私の手元を覗き込んだ。

ふわっと甘い香りが鼻腔をくすぐる。緋菜子ねえさんのおい。

「ふーん、生物やってるんだ……」

お姉ちゃんは、参考書の問題に目を留めた。

「あらあら、またこんな基本的な問題でひっかかったちゃって……お姉ちゃんがやってあげよつか？」

緋菜子ねえさんは、机の隅っこにちょこんと手をついて、その上に顎をのせ、小首を傾げてみせた。

「え……う……でも、もう少し自分でやってみるから」

「そう」お姉ちゃんはうなずいた。

「ところで千佳」

突然の質問。ビクツとなる。

「この鍵のかかっている引き出し、何が入ってるの？ ひみつの宝物？」

「え……ああ、成績表とか通信簿とかが入って……」

「ちよっと開けてみていいかな？」

「う……うん、別に……」

断ればあやしまれる——そう思った。

確かそこには見られて困るようなものは入っていないはず。
引き出しの鍵をわたし、勉強に戻る。

宝探しをする子どものように目を輝かせながら、緋菜子ねえさんは、鍵を引き出しに差し込んだ。

この女には、どこかそういう少女じみたところがあった。

その美しい横顔が、乙女チックに華やいで見えた。

「きゃっ、なにこれーっ!？」

緋菜子ねえさんの声が、部屋の空気を切り裂いた。

びくっとして、硬直する私。

そして、おそろおそろ、お姉ちゃんのほうを振り向く……

「!」

私は自分の目をうたがった。

引き出しから出てきた数冊の本――

えっちな表紙の過激なレディコミと、男の子同士がからみあうB

小説の――

「ち……千佳あーっっ」

緋菜子ねえさんは、顔を真っ赤にしながら、口元を手でおおって
いた。

「ちっ……違……」

私は椅子から飛び降りて、それらを両手でおおい隠した。

「ち……千佳……」

お姉ちゃんは、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「ち……違……」

私は視線を床に落としたまま訴えた。

「私、こんなの知らない……!」

目にためた涙が、頬ににじんだ。

「私じゃないだもん……」

お姉ちゃんは、黙ったまま私の横顔を見つめていた。

狼狽の色が、ありありと目に浮かんでいた。

引き出しから出てきたうちの一冊を、気まずそうに腕に抱えなが

ら……。

「ほんとだもん……」

それが精一杯だった。

私には、それしか言うことができなかった。

第五話 終

第五話 千佳のえっちな秘密（後書き）

まさかのエッチ本、発覚……。必死で否定する千佳ですが……。次回、小口家の夕食に招待されたバンドナとメガネ。そこで意外な告白が……。

第六話 大人になった証拠（前書き）

引き出しから見つけたH本……。妹の隠し事に狼狽する緋菜子ですが……。

今回は、一部予定を変更してお届けいたします。ごめんなさいね m
() m

連載5日目です、ずいぶんたくさんの人に読んでいただいているみたいで、ありがとうございます

第六話 大人になった証拠

絨毯の上に散乱したB・L小説、そしてアダルトなレディコミの表紙――

その上に覆いかぶさるように膝をついた千佳。
姉妹の間に気まずい沈黙が流れる。

千佳は今にも泣き出しそうだった。肩が小刻みに震えている。
ちか ひなこ

緋菜子は黙って千佳の背中を見つめていた。

そして、決意したように、妹のとなりに膝をくずして座ると、床に散らばったそれらをていねいに拾い集めて言った。

「別にいいじゃない、千佳」

緋菜子は、そのうちの一つを手にとって広げた。

思わずそれを手で覆い隠そうとする千佳。

「千佳くらの年頃の子が、性に興味をもつのは当然のことだもん。大人になった証拠なのよ」

緋菜子は、照れ笑いを浮かべながら、レディコミのページをめくった。

「きゃっ、すごい……」

可憐な少女の性交シーンを指で示しながら、緋菜子は千佳に身を寄せた。

「千佳も早くいい人を見つけないくっちゃね」

ふんわりと甘い匂いがただよって、白衣の裾がひるがえった。

スラリと伸びた膝下が、千佳の視界を縦に横切った。

「じゃ、おやすみね」

そう言って、緋菜子はドアの向こうへと姿を消した。

千佳は肩を落として、大きく安堵の息をついた。

姉の残り香が、まだほのかにただよっていた。

* * * * *
* * * * *

——で、すわ こはん諏訪湖畔高校——

「うわっ、前回の模試、かみすわ上諏訪大学の医学部、合格率80%だよ！
さすが、ボク」

模試の結果通知を見ながら、悦に入ってほくそえむボク。

「いつそ、さらに難関でも狙ってみましようかねえー……」
そんな余韻をぶち壊しにする、いつものアイツの叫び声。

「メガネー、メガネー、メガネ——っ！！？」

「いー加減、そのネタやめてくださいよ！！ 訴えますよ！？」

「うるせーだ、メガネー！！」

バンダナは興奮もあらわに言った。

「緋菜子さんが、オレた二人を夕食に招いてくれただよおおー
っっ！！」

「マ……マジだか！？」

ボクは思わず顔をあげた。

「マジ、マジ、大マジだよ。なっ、小口！？」

バンダナは小口さんを振り返った。

「うん……」

小口さんは、仕方なくという感じで頷いた。

「ほら見るおー」

バンダナは得意げな顔を向けて、ボクに言った。

「よっしゃー、これを機に、一気に緋菜子さんと親密になるだーっ
！ いやっほー、S・E・X！！」

こ、公衆の面前で、何て単語口走ってんだ、コイツ！？

あーあ、これだでバカは困る……

ボクはなるべく他人のフリをして、バンダナから遠ざかった。

飛び跳ねるバンダナとは対照的に、小口さんは浮かない顔で沈ん

でいた。

まるで、喜ぶバンダナから目を背けようとするように……
その後ろ姿が、なんだかとてもさみしそうだった。

第六話 終

第六話 大人になった証拠（後書き）

すでに緋菜子とやる気まんまんのバンダナ。この自信は一体どこから……？

次回、医進ゼミをめぐる小口姉妹の気まずい空気。そしてバンダナの恋の行方は……？

【りさこのお知らせ】

もうしばらくはR - 15的内容じゃないので安心してくださいね ミ
R - 18描写にならないようには気をつけますね（＾＾）

私、本格的に書き出すと止まらない奴なんです……。

京産大の益川先生、ノーベル賞、おめでと ミ 小林・益川理論、
応援してました（＾＾）

第七話 やめちゃえば？（前書き）

緋菜子から招待されたバンドナたち。はたして念願のS・E・Xは……？

この小説は毎日更新しているので、安心して読んでくださいね（^）

第七話 やめちゃえば？

その晩――

「はははははは、実はそーなんスよー!!」

平和な団欒をぶち壊す、バンダナの馬鹿笑い。

「ボク、勉強のほうはアレなんですけど、テニスではインハイいき
ましたから、インターハイ!」

「へえー、木村くんって、スポーツマンなのね」

緋菜子^{ひなこ}さんは、くすつと笑った。

「たく、飯くらい落ちていて食べよな、バンダナ。」

「千佳はどうなの? 医学部は大丈夫そう?」

台所で煮物を盛りつけながら、緋菜子さんは訊いた。

「塾の医進ゼミ、がんばってるんでしょ?」

小口さんの表情がこわばった。

「わ……私……」

小口さんは、ためらいがちに口を開いた。

「塾……やめようと思ってるの」

ガチャンッ

流しのほうで食器のくずれる音がした。

能天気到大飯を食らっていたバンダナが、急に立ち上がってあたりを見回す。

地震じゃねえつつつの。

「ち……千佳……? あなた、塾やめるって、一体……」

緋菜子さんは、床に落とした菜箸を拾うと、不安げな眼差しを小口さんに向けた。

小口さんの顔は真っ青だった。

びくびくしながら、緋菜子さんの顔色をうかがっていた。

「実は」

彼女は、おずおずと口を開いた。

「実は私、最初から全然ついていけなかったの」

ボクたちの前で、むりやり真実を告白させられる小口さん。

それは、ほとんど裁判の被告人席だった。

それがいたたまれなくて……。

「それに私、家が病院だからって医者になりたいわけじゃないし……だから……」

ぎこちなくそう言うと、小口さんは所在無さげに、席で小さくなっていた。

きっと、勇気のいる告白だったのだと思う。

自分を応援してくれている家族の仕事を否定するような後ろめたさ。

言つに言えない心の重石——

いざ下ろしてみると、それは家族の間の溝となつて、かえつて罪の意識をつのらせるばかりだった。

「ご……ごめんなさい……」

どうしていいのかわからず、茶碗をしつかりと抱いたまま、彼女は縮こまつて硬直していた。

「お、小口さん、まだあきらめるのは早いだよ」

ボクはどうにかその場を取り持つように言った。

「は、はは……一浪や二浪くらいしたってさ……」

「やめちゃえば？ ウン」

言いかけたそばから、バンダナのお気楽発言。

ボクも緋菜子さんも小口さんも——三人が一斉にかたまつた。

な、なんだ、コイツ——ッ!?

ボクは、無責任なバンダナの態度に怒りを覚えた。

つたく、なんなんだ、コイツは？ 人の気も知らないで!!

「それよりもよー」

バンダナは、口の周りにご飯粒をくつつけながら、小口さんのほうを向いた。

突然のことに、彼女の頬が紅潮する。

バンダナは明るく言い放った。

「小口、おめ、オレと一緒に上諏訪大学経済学部をめざさねーだか
？」
「？」

大名案と言わんばかりのバンダナ。

「キミにはムリですよ」

ボクは言ってやった。

「一応、国公立のはしくれなんだから。あー、イヤだ、イヤだ、現実みてない人は」

「う、うるせーだぞ、メガネー！ 歯を見せるなあ！？」

ボクはしこたま殴られて、テーブルの上に無残な姿をさらした。
くっ、くっそあー、この野蛮人ー！

「ま、おめはオレよか頭いーんだからよ」

バンダナは小口さんに向かって言った。

「また勉強とか教えちくりや、な！」

「木村クン……」

彼女は小さく呟いた。

「一緒に勉強しよーぜ？ ガッツだぜ、小口っ！」
勢いだけで何も考えてないバンダナ。

この男は一体……

ボクと緋菜子さんは、固唾を呑んで成り行きを見守っていた。
「なっ」

気楽な笑顔で愛想をふりまくバンダナ。

小口さんは震えていた。

分厚いメガネの向こう側に、涙をいつぱいためながら。

それを振り払うようにして、小口さんは小さく首を横に振ると、
「うんっ」と力強くうなずいた。

なんでだ——っ！！？

ボクはショックを隠しきれずにかたまっていた。

なんで、こんな奴の一言で元気になれるだーっ！？

「ははははー、よし、小口、がんばろーなっ」

一件落着といった感じのバンダナ。

「そうよ、ムリして勉強しなくてもいいのよ、千佳」

緋菜子さんは、やさしく妹の肩に触れた。

「病院のほうは、私や兄さんがいるんだから。ばかね、誰も責めたりしないわよ」

いつものおだやかな表情を取り戻すと、緋菜子さんは「くすつ」と小さく笑った。

ひ、緋菜子さんまでバンダナの口車に乗るなんて、そんなあー…。

「う……うん」

やさしい緋菜子さんの言葉に、小口さんは小さくうなずいた。

心もちその口元がほころんで、はにかんだような笑顔がかわいらしく見えた。

そんな妹の姿を見て、緋菜子さんはやさしく目を細めるのだった。食卓にもとの明るさが戻り、ボクたちは緋菜子さんの手料理に舌鼓を打った。

意外と家庭的なんだ、緋菜子さんって――

そんなことを思った。

第七話 終

第七話 やめちゃえば？（後書き）

バンダナの一言で元気を取り戻した小口さん。まさか、これは、恋！？

次回、バンダナが緋菜子と初デート！？ まさかS・E・X！？

【りさこのお知らせ】

あの、全くの私信で申し訳ないのだけど、フッキー、元気？ 小林先輩、ノーベル賞、おめでとね。フッキーも喜んでる？

今度はCPT対称性も破って、次のノーベル賞もいただけるかしら

（* ^ ^ *）

第八話 女は食えるときに食っちゃう主義（前書き）

小口姉妹に急接近のバンダナ。本気で緋菜子とのS・E・Xを夢見
ているみたい……（――；）

にしても、こんなバカバカしい小説に毎日お集まりの数百人のみな
さん……みなさんも好きなんですネ、恋のお話 三

第八話 女は食えるときに食っちゃう主義

朝、千佳は鞆に教科書を詰めながら考えていた。

今日も学校で木村クンに会える——そう思うと、鼻歌を歌いた
い気もちになる。

今日は、どんな楽しいことが起こるんだろう？

きつとすてきな何かが——そんな淡い期待に胸をふくらませな
がら。

「——千佳！」

その声に、ドキッとしてドアの方向を振り向く。

いつものように、半開きのドアの隙間から、^{ひなこ}緋菜子の顔がのぞい
ていた。

「おはよう。最近、ご機嫌ね」

緋菜子は「くすつ」と笑うと、白衣のポケットから一枚のメモを
取り出した。

「ねえ、千佳。これ、木村くんにわたしてくれない？」

「え……え、木村クンに？」

「ええ」

緋菜子はニコツとほほえんだ。

「千佳のこと励ましてくれたお礼に、外でごちそうしてあげようと
思つて……お願いね」

「う……うん、わかった」

「さっ、遅刻するわよ。いつてらっしやい！」

緋菜子は、せつつくようにして千佳の背中を叩いた。

「あ……はい、いつてきます！」

パタパタと階段を駆け下りてゆく千佳。

その後ろ姿を見送りながら、緋菜子はもう一度「くすつ」と笑つ
た。

緋菜子は、机の上に伏せられた白い写真立てを見て目を細めた。

そして、それを表にして参考書の手前に立てかけると、栗色の長い髪を揺らしながら、静かに部屋を後にした。

後には、甘い花のような匂いだけが残された。

* * * * *
* * * * *

——湖畔通り——

「それにしても、小口さんがあんなバンダナの口車に乗らないように気をつけないと、危ないですね……」

単語帳を片手に、ボクはブックサと愚痴を呟いていた。

「メガネー、メガネー、メガネエエエ——！！？」

20メートル先から、またあの声……

「フ……ボクもメガネという現実を受け入れることにしましたよ……イヤイヤね」

ボクは、ため息混じりにそう言った。

「うるせーだ、メガネー！！ それわりも」

バンダナは、ボクの嘆息を一方的に無視して続けた。

「ついに緋菜子さんから、デートにさそわれただーっ！！！」

「そ、そげなーっ!？」

ボクは単語帳をめくりかけたままの姿勢で硬直した。

「お……小口さん、それ、事実だか？」

あやふやな笑みを浮かべつつ、ボクは彼女に訊いた。

笑おうとしてもできなかった。笑顔が引きつり、声が上がった。

「う……うん……」

小口さんはうなずいた。

「私のこと、励ましてくれたお礼に、外食でも……って」

「なァーんだ、義理か。フツ、どーりで」

事実を知ったボクは、スツキリした気分で、浮かれるバンダナを一蹴した。

「テメー、メガネ!!! なんだ、その失敬なりアクションは!?!」
自分の立場とか全然わかってないバンダナ。

あー、かわいそーに。

「あ、あのう……木村クン……」

小口さんがおずおずと口を開く。

「なんだ、小口? 義兄さんと呼んでもいいだぞ?」

本気で照れ笑いを浮かべるバンダナ。バカ?

「わ……私……」

小口さんはためらいがちに言った。

「緋菜子ねえさんとの食事、行かないほうがいいと思う……」の
バンダナの表情が、一瞬、動いた。

「——なんでだ、小口? おかしなコト言うだな」

いつもの笑顔に戻って、バンダナは訊いた。

「だ……だって、木村クン」

小口さんは、その先を言いにくそうに、肩をすばめた。

それでも、彼女は意を決したように口を開いた。

「木村クン、もし行ったら、たぶん……その、緋菜子ねえさんに、
ヘンなコトされる……と、思……う」

はひっ!?

ボクは自分の耳を疑った。

ヘンなコトって何?

まさか、小口さんの口からそんな言葉が……!

取り返しのつかない、その言葉——小口さんの表情に、かすかな後悔の翳^{かげ}がよぎった。

しばしの沈黙を経て、バンダナはなだめるような素振りで言った。

「小口よオ」

びくつとして呼びかけに応える彼女。

「なに勘違いしてつか知らねーけどよー」

バンダナは言った。

「あんないい姉さんのコト、悪く言うのはよくないと思っぜ」
最後の言葉は真剣に響いた。

「なっ」

念を押すようなバンダナの目――

小口さんは、「う……うん」と小さな声でうつむいた。

「それに、緋菜子さんになら、されちゃってもいいもんね、オレ！
女は食える時に食っちゃう主義だだよ、オレ！」

いつもの陽気さで、ボクにスリーパーホールドを仕掛けてくるバンダナ。

くっそぉー、バカが夢みやがってーっっ！

ボクはタップしながら叫んでいた。

小口さんだけが、なすすべもなく、無言のまま立ち尽くしていた。

何か言いたげなその表情が、印象的だった。

第八話 終

第八話 女は食えるときに食っちゃう主義（後書き）

次第に現実味を帯びてくる緋菜子とのS・E・X!？ それって本当!？

次回、緋菜子との初デート(?)。そのまま部屋まで行ってしまうバンダナだけど……。

第九話 初めてのデート（前書き）

今夜、緋菜子とやる気まんまんのバンドナ。みなさん、初デートで初えっちって、どうなんですか？ 私はやだな……

第九話 初めてのデート

夜――

やわらかな光彩につつまれたレストランの店内は、心地よいほのかなぬくもりと、芳ばしいハーブの香りに満たされていた。

季節はもう秋――信州の山の食材を贅沢に使った、旬の味覚のディナー・コース――

それは、最高のひとときだった。

「いやー、お姉さん、こんなうまいモンごちそうになっちゃって、ホントにいーんスカ!？」

拓夫（バンダナのこと……ですケド!？）は、ナイフを片手に歓声を上げた。

「いいのよ、木村くん。どんどん食べてね」

よそ行きのシャツに、赤のネクタイ――精一杯めかしこんできた拓夫を見て、緋菜子^{ひなこ}はうれしそうに目を細めた。

上品な黒のジャージードレスに、シャツジャケットを羽織った私服の緋菜子――

見慣れた白衣のそれと異なり、今夜の緋菜子は、ゾクツとするほどセクシーで、エレガントに見えた。

緋菜子が自分のために着飾ってきたかと思うと、拓夫は天にものぼる心地で、うっとりそれに見とれた。

四人がけの広いテーブルを贅沢に使い、二人はいくぶん離れた距離で向かい合っていた。

「うちは病院をやっていて忙しいから、木村くんみたいに千佳の相談にのってくれる人がいて、本当に感謝しているんですよ？」

緋菜子の言葉に、拓夫はフォークを握る手を止めて、ブンブンと首を横に振った。

「いやあ、こっちこそ小口には勉強を教えてもらって、助かってるっス！」

「あ、それなら、もしよかったら、私が昔つかつた参考書、どれでも好きなものもっていつていいですよ？ 高校の、まだとつてあるんです。貧乏性だから」

「そ、それ、超ほしーです！！ もお、感激っス！！」

拓夫はキラキラと目を輝かせた。

「でも……書き込みとかしてあるだろうし、やっぱ、やだよね、そんなの？ 汚い字で恥ずかしいし……」

「カンケーないっスよ！！ ノープロブレムっス！！」

参考書よりも、むしろ緋菜子の書き込みに興味津々の拓夫。

「んじゃあ、さっそく選ばせて下さいっ！！」

こうなったら、部屋に上がった勢いで、今夜は最後まで――

そんな下心がなかったといえ、ウソになる。

「くすっ、熱心なのね、木村くん」

そんな拓夫を見て、緋菜子はもう一度、目を細めるのだった。

第九話 終

第九話 初めてのデート（後書き）

まんまと部屋に上がりこむ口実を手に入れてしまったバンダナ。カモがネギ背負ってとは、まさにこのことです……

次回、緋菜子のお部屋。まさか本当に緋菜子とSEX……？

【りさこのお知らせ】

よかったら、サスペンス小説『エステル・アシュケナージの冒険』もご覧になってくださいね。

『茨の薔薇の園を出て』と『マリア神社へようこそ』はR - 18なので、大人の方だけ、どうぞ

第10話 ひな子の部屋で（前書き）

憧れの緋菜子の部屋。S・E・Xモード全開の拓夫ですが……。
くどいようだけど、私は初デートで初えっちなんで嫌！！

第10話 ひな子の部屋で

ガチャ――

ノブが回り、扉がゆつくりと開く。

「ごめんね、散らかっていて……恥ずかしいな」

「お、おじゃましまあすっスー!!」

緋菜子ひなこにうながされ、拓夫は部屋に足を踏み入れた。

「ど、どこが散らかってんスカー!? ピカピカっつーずら、こーゆーの!？」

きれいに片付いた室内を見て、拓夫は感嘆の声を上げた。

思ったとおりの清楚な部屋だった。

掃除も整頓も行き届いた、大人の女性の部屋――棚には、むずかしい医学書が几帳面に並べてあった。

毎月、新しく十冊は読まない――そう言って、緋菜子は笑った。

独特の甘い香りにうっとりとなる。

スタイリッシュなガラス・テーブルの上に生けられた花の匂いだろっか？

それとも――

その時だった。

ブーブーブー

不躰に鳴るバイブの振動音――

緋菜子はあわててケータイを取り出した。

「あつ……こんな時に、もうっ……」

「どっ、どーしたんスカ!?」

「ごめんなさい、緊急の応援要請みたい」

ジャケットを脱ぎ捨てると、緋菜子はクローゼットから白衣を取り出した。

「あ、参考書、好きに探していいから」

「そ、そんなあ、今日は非番じゃ……」

「ごめんなさい、でも」

緋菜子の表情から笑顔が消えた。

「これが私の仕事だから」

ドキツとする一言だった。

甘ったるい夢想から、一気に現実へと引き戻されたような気がした。

緋菜子はドアに手をかけた。

「あ……」

拓夫の声には振り返らず、緋菜子はそのまま扉の向こう側へと消えていった。

ボタン

ドアの閉まる音が、絶望的にひびいた。

拓夫は、手にとった参考書に目を落として黙り込んだ。

あーあ、見せつけられちゃったなあ……

そう思った。

オレみてえなガキじゃ、つりあわねー女だよ、やっぱ――

そんな思いが、今さらのようにこみあげてくる。

メガネの言うとおりだったかもしれない……

心の中でそう呟くと、拓夫はポケットからコンドームの袋を取り出した。

しゃれた化粧品の包みのようなデザインのそれ。

あーあ、こんなモンまで用意して、バカみてえ……

床に足をくずして座り込むと、拓夫は一つ大きく肩で息をついた。
早えーと参考書かりて帰るだな――

その時だった。

コンコン

ドアをノックする乾いた音。

「あん？」

拓夫は伏せていた顔をあげた。

こんな時間に誰が——最悪の想像が脳裏をよぎる。

まさか、緋菜子さんの親父さん！？

「キサマ、よくもウチの緋菜子をキズモノにしてくれただねーかあ、あああ！？」

夜這いとはいい度胸だ——そんな怒声とともに首を絞められて……？

そんなリアルな想像に、拓夫は震え上がった。

オ、オレ、何もしてねーし、てか、まだしたことないってばーっ
っ！……！

「……もしかして、木村……クン？」

声の主は、予想していた親父ではなく、女の子のそれだった。

「は！？ 小口！？」

拓夫は起き上がって振り向いた。

「お、おめ、なんでここにいるだ？」

「部屋、お姉ちゃんとなりだもんで……」

パジャマ姿の自分を羞じるように、千佳は顔を伏せた。

「あ、そーなの？」

拓夫の顔に、安堵の笑みが浮かんだ。

「ちょーといーや、小口。おめも参考書選び、手伝っちくりや。経
済学部ってのは、文系か理系か曖昧だでのう」

「……やっぱり、こんなとくに連れ込まれちゃったんだ」

千佳は拒絶するように言った。

「まだ言ってるだか、小口？」

拓夫は呆れたようにため息をついた。

「見てのとーり、全然相手にもされてねーって」

「な……なら、いーけど……」

千佳はおずおずとうなずいた。

「はっはくん、わかったぞお？」

「えっ、えっ!？」

拓夫の言葉に、ドキツとして身をこわばらせる千佳。

「おめ、あんまり緋菜子ねえさんのことが好きなもんだから、他のヤツにとられたくねーだな？　へっへー」

「ええっ!？」

千佳は胸の高鳴りに抗いながら、ぎこちなく何度も首を横に振った。

「まっ、それくらい緋菜子さんがすてきだったのは、わかるけどよ
オー」

拓夫は、しったかぶったように、何度もうなずいて見せた。

ちがうよ……そうじゃないよ……

千佳は、そう叫びたい気持ちだった。

私が好きなのはお姉ちゃんなんかじゃない。

私は木村クンが好きなの――

「だけだよー」

拓夫はゆらゆらと千佳に近づくと、隙を見てシュパツとメガネをとりあげた。

「あっ」

千佳は小さく悲鳴を上げた。

そんな千佳の素顔を、拓夫はじっと見つめていた。

え、え……

何が起きているのかわからず、千佳は目をそらすことができずにいた。

「こーすればよ、おめもそこそこかわいいーと思うぜ」

拓夫は無邪気に笑った。

「もっと自信もてよ、小口っ」
その一言が、トクンと胸にひびいた。
うん……

千佳は小さくうなずいていた。
胸がときめいていくのがわかった。
きれいになりたい——
生まれて初めてそう思った。

第十話 終

第10話 ひな子の部屋で（後書き）

恋に目覚めた千佳。拓夫への想いは届くのでしょうか？
次回、千佳が大変身！？ 恋する乙女は怖い……？

第11話 お姉ちゃんなんかじゃないもん！（前書き）

拓夫に惹かれてゆく千佳。大決心です！

みなさんは、好きな人のために大変身、できますか？ 私はできません！

第11話 お姉ちゃんなんかじゃないもん！

それからちつとけ経ったある朝――

「うおつ、ラッセルの世界五分前仮説を論理的にくつがえす証明法が発表されたって、マジだか!？」

ボクはネットに流れたパチ情報に興奮していた。

「うーん、次のフィールズ賞はこれで決まりですねえ……」(どうだか)

と、その時、斜め前方に誰かの人影が。

「浜くん、おはよう」

「ええ、おは……」

返事をしかけて「あれっ」と思った。

ストライプの入ったスタイリッシュな黒のシャツに、スラリとしたストレッチパンツ、それに毛先にシャギーの入った、軽くて活動的なミディアム・レイヤー・カット――それでいて、さわり心地のよさそうなキュツとした襟足の……

「お、おめさん、いったい誰えええ!？」

目の前の女子が誰だかわからず、ボクは目をしばたかせた。

「や……やっぱりヘン……だよね」

いや、ヘンじゃないよ。だけど、誰なの？

「よつ、小口。オレの紹介した美容院、行ってきたか？ カリスマっペーら？ カリスマー」

カバン片手にバンダナが手を振る。

「きつ……木村ク……ン」

顔を真っ赤に紅潮させる小口……さん(?)。

「おつ、かわいいーじゃん。目もコンタクトにしただな。おめ、そのほうがうんといいだぞ！ なっ、メガネ」

「う……うん!」

ボクは一も二もなくうなずいた。

こ、これが小口さん？

変われば変わるもんだなやあ、女の子って……（ちよつと怖い）。
「やっぱり、緋菜子さんの妹というだけのことはあるだな」

バンダナはケータイをいじりながら言った。

その言葉に、小口さんの表情が動いた。

「実は、さっき緋菜子さんからメールをもらって、こないだは失礼したから、今夜また会おうって……いえーい」

「フウ、懲りない人ですねえ」

「ー加減に目を覚ませよな、バンダナよ……」。

それにしても小口さん、急に黙り込んでどうしたんだろう？

そう訊ねようとした、その時だった。

「——木村……クン」

それは低い呟きだった。

「あの、緋菜子ねえさんはね」

訴えかけるような小口さんの眼差し——初めて見るような気がした。

小口さんは言った。

「緋菜子ねえさん、私の本当の姉さんなんかじゃないの」

「お……小口？」

バンダナは、何が起こったのかわからない様子で訊き返した。

「あんな人……」

小口さんの目に涙が浮かぶ。

「あんな人、おねーちゃんなんかじゃないもんっ！！」

刹那、クラスがどよめいた。

「あんな人、好きになっただって傷つくだけだもんっ！！」

「ちよっ……小口、落ちてこーや、なっ。声、でけーって……」

狼狽を隠しきれないバンダナ。

ボクだってショックだ。

小口さんがそんな大声を出すなんて、それもあんなことを……

「それに、緋菜子ねえさんの顔」

これまで押さえつけていたものを全て吐き出すかのように、彼女は言った。

「どーせ整形に決まってる。もともと美人だったのはまちがいないけど、昔の緋菜子ねえさん、あんな顔じゃなかった気がする。あたし、ちっちゃかったで、よく覚えてないけど……」

ひ、緋菜子さんは整形美人……！？

小口さんの言葉に、ボクの目はうつろになった。

「——小口」

バンダナは言った。

「その話は、もういいら？」

真剣な声音こわねだった。

小口さんはビクツとして押し黙った。

「なっ……」

バンダナは静かに言った。

けれど、それは有無を言わさない、力をこめた言い方だった。

その語尾にかすかな苛立ちがにじんでいた。

小口さんは力なくうなずいた。

見ているのがかわいそうなほどに……。

見ちがえるようにきれいになった小口さん。

それがどこか空々しく浮いて見え、いたたまれなかった。

この胸の苦しさは、なんなのだろう——

そう思った。

第11話 お姉ちゃんなんかじゃないもん！（後書き）

大変身した千佳。でも、バンダナの目には緋菜子しか映っていないく
て……。

次回、再び緋菜子の部屋で。いよいよ本気でSEX！？ 懲りない
バンダナです。

【りさこの考え】

六次の隔たりっていう理論、知ってますか？

世界中どこでも、平均六人の知人を介せば手紙が届くという理論で
す。

ちなみに、私の場合、三人目で赤の他人のノーベル賞の小林教授ま
で行けるんです。

もっとも、死んだうちのおじいさんが生きてればの話ですけど…
…。

おばあちゃんに頼もうかしら？

でも、別ルートでも三人で行けます。赤の他人ってことには変わり
ないけれど……。

世界って狭いですね

第12話 告白！？（前書き）

再び緋菜子の部屋に足を踏み入れた拓夫。巡ってきた二度目のチャンスに……？

第12話 告白！？

「よく来てくれたわね、木村くん」

緋菜子ひなこの言葉に、拓夫の胸は高鳴った。

「怒って、もう会ってももらえないかと思っちゃった」

緋菜子は、しゅんとして上目遣いに拓夫の顔を見た。

「そ……そんな、とんでもないっス！」

あわてて緋菜子の言葉を打ち消す拓夫。

「ホント、また部屋に呼んでくれてうれしいっス」

二度目のチャンス——それがこんなにも簡単に巡ってくるなんて……

正直、そう思った。

「そう？　ならいいのだけど」

緋菜子は、紙の包みを取り出すと、「これ、お詫びのしるしに」と、拓夫に差し出した。

「ん、何スか、コレ？」

包みを開けて、中を確かめる拓夫。

「こっ、これ、幻の上諏訪大学経済学部かみすわの赤本あかほん！！」

「ホントはもつと早くプレゼントしたかったんだけど、なかなか書店に置いてなくて……もしかして、もつてた？」

「こ、これ、見つけるの大変だったでしょ！？　いや、マイナーなやつだで」

（たまにおいてへん赤本、ありますよね？／作者・談）

拓夫はパラパラと中身をめくりながら思った。

やったあー、やつぱ、オレの緋菜子は最高だーっ！

くりかえし礼を述べる拓夫を見て、緋菜子は「よかった」と目を細めると、「くすっ」と小さく微笑むのだった。

「じゃ、さっそくちよつと見てみよっか。ふふっ、こっちは千佳の分だったりして」

そう言つて立ち上がると、緋菜子は引き出しの中からもう一冊の赤本を取り出した。

「うわっ…… たまんねえな、あの太もも……」

目の前を横切る緋菜子の白い太ももに、拓夫の目は釘付けとなつた。

それに、いい匂いが……

「へえー、上諏訪大の経済つて、二次は国語、外国語のほかは社会と数学からの選択なんだー」

そんな言葉も上の空で、拓夫はひくひくと鼻を動かしていた。せ、石鹸の匂いみたい……

「木村くんは文系だから、社会で受験すればちょうどいいね」

「えっ…… はい…… そーっスね、社会っスね……」

「木村…… くん？ 私の話、そんなにつままない？」

緋菜子はしゅんとして黙り込んだ。

「い、いえっ？ とんでもないっス！ た、ただ……」

拓夫はあわてて首を横に振った。

「その、ど、どーして、緋菜子さんはこんなにいい匂いがするんだろっ——…… って……」

「えっ……？」

緋菜子は言葉に詰まって、拓夫の顔を見つめた。

その視線に耐え切れず、拓夫は真っ赤になつてうつむいた。

「や…… やっぱ、おかしいですかねえ、オレ……。い、今の、忘れちゃって下さい」

「う…… うっん、そんなことは……」

つられて緋菜子も目を伏せた。

「でもね、木村くん」

気まずい沈黙をやぶるように、緋菜子は言った。

「私だけじゃないと思うよ？」

「えっ？」

拓夫は伏せていた顔をあげた。

「女の子はきつと、みんないい匂いがするものなのよ」
緋菜子は前髪を払うようにして言った。

「でも、木村くんから見れば、私なんて女の子じゃなくて、おばさん……か」

「そつ、そんなことないですよ、ぜつたい！」

ウソじゃない。精一杯の気持ちをこめて否定する。
今なら言える——そう思った。

「ぼ……僕つ……そのつ、緋菜子さんのこと、す……」

「えつ……えつ、なに!？」

言いかけた、その時だった。

コンコン

誰かがドアをノックする音——

誰だー、こんな時にいいいーっ!？

拓夫は、恨めしげに音のする方向をにらみつけた。

「どうぞー」

緋菜子は、膝をくずしてノックの音に応えた。

ガチャと音がして、入ってきたのは、妹の千佳だった。

「おつ、小口い……?」

また、おめえか——あやうく言いかけて、拓夫は口をつぐんだ。

お、小口い、おめ、何しにきただー!？ しっ、しっ!

半べそをかきながら、拓夫は手で追い払うしぐさをして見せた。

しまいにや怒るぞ、コラーっ!

「どうしたの、千佳? あ、これ、あなたの赤本……」

緋菜子はニコツと笑うと、その大きな瞳を細めた。

「木村くん……やっぱり来てたんだ」

「お……おっ……」

千佳の言葉に、ばつの悪い何かを感じ、拓夫は思わず目を泳がせた。

「私、お茶いれてくるから」

そっぴい残して、千佳は不機嫌そうにドアを閉めた。

拓夫は啞然として、その後ろ姿を見送った。

「……まったく、千佳ったら、変な子ねえ」

緋菜子は小さくため息をついた。

「もしかして、私が木村ちゃんと仲良くしてるのが気に入らないとか？　なーんて、きつと、そうよ？」

「またまた、ンなわきやないでしょうよ」

拓夫は即座に否定した。

「僕あ、小口みたいなマジメちゃんからは、忌み嫌われるタイプだ
で——」

「そんなことないわよ、くすくす」

緋菜子はおかしそうに笑うと、拓夫に向き直った。

「それよりも、木村くん」

「はい？」

「さっき、何て言いかけたの？」

「え……え！？」

突然のことに、胸が早鐘を打つ。

「『僕、緋菜子さんのこと、す……』 なんとかって」

大きな瞳が、じつと拓夫の顔を見つめていた。

ドキドキが止まらなかった。

今さらもう一度って言われたって、心の準備が——

喉から出かった告白の言葉が、今は胸につかえて苦しかった。

額には、うつすらと汗がにじんでいた。

第12話 告白！？（後書き）

大人の女性の魅力にメロメロの拓夫。千佳の気持ちには気づかず
……。次回、いよいよ初えっち？ その時、千佳は……？

第13話 カラダ（前書き）

勢いで告白するつもりが、言い直しを求められて……。拓夫、ピンチ！

緋菜子、ちょっと鈍いって噂が……？

第13話 カラダ

「そつ……それは、そのお……」

緋菜子の問いかけに、拓夫は二の句をつぐことができずに、狼狽した。

無意識のうちに言い訳を考えようとする自分——どきまぎしながら。

でも、言わなきゃダメだと叫ぶ、心の中のもう一人の——そんな自分が確かにいた。

俺、緋菜子さんのこと、す……

「もしかして、その続き……って」

機先を制するように、緋菜子は言った。

ゴクリ

思わず生唾をのみこむ。

「木村くんが言おうとしたのって、『緋菜子さんのこと、す——

——』」

極限まで高まる緊張。背筋が硬直し、腋の下に汗がにじんだ。

緋菜子は言った。

「『緋菜子さんのこと、す……こしだけ、実年齢より若く見えますよ?』……とか?」

頬を淡く染めながら、緋菜子は恥ずかしそうに指で絨毯の上に「の」の字を書いていた。

「はい?」

啞然として、脱力する拓夫。

「や……やっぱり……」

それを見た緋菜子は、眉毛を八の字に寄せて、口元を手で覆った。

「おばさん……なのね、26歳って……」

緋菜子はうるたえながら呟いた。

「そうよね、世代、ちがうもんね……それに、医者って老けるの早

いし……」

「そつ、そんなぁー、適齡期つスよ、適齡期っ！！」

拓夫はあわてて緋菜子の言葉を打ち消した。

「……それって、慰めになってない」

緋菜子はプーッと頬を膨らませると、怒ったように顔を背けた。

「えっ、ええっ！？」

拓夫の全身からサーッと血の気が引く。

「うそ、冗談よ」

緋菜子はいくぶんさみしそうに笑った。

「でも、やっぱり」

拓夫を振り向いて、緋菜子は続けた。

「木村くんのような若い男の子には、同じ若い女の子が一番似合ってるわ」

それは、うつとりするほど甘い囁きだった。

何かをなつかしむようなその眼差しに、あらがいがたく惹き込まれて――

「それに、私みたいなおばさんには、応援することしかできないから」

刹那、拓夫と目を合わせると、緋菜子は羞じるようにして目を伏せた。

「そんなこと、ないっス！」

喉のつかえが取れたように――拓夫は無意識に叫び出していた。

「木村……くん？」

緋菜子は驚いたように顔をあげた。

「緋菜子さん、顔だってカラダだって……ぜんぜん魅力的じゃないっスか！」

緋菜子は目を丸くしたまま黙り込んでいた。

次第にその顔が紅潮し、清らかな眉間が険しく歪んだ。

「あ……」

拓夫は思わず息をのんだ。

「カ……カラダ……って」

緋菜子は、反射的にショートパンツの裾を押さえて、太ももをかくした。

「えっ……ちが……その、スタイルってゆーか……その……」

拓夫は、言葉足らずな自分を恨めしく思いながら、どうにか弁解を試みていた。

ちがう、そんなつもりじゃ――

背筋に冷たいものが流れた。胸のあたりにぽっかりと穴が開いたような、この感覚。

「ひどい」

緋菜子は拒絶するように言った。

「最初から私のコト、そんな目で見てたんだ」
軽蔑の眼差し――

そのまなじりは、怒りと恐怖に震えていた。

第13話 終

第13話 カラダ（後書き）

カラダ目当て——拓夫の下心。露骨な言い方が緋菜子を傷つけて……。
次回、緋菜子に拒絶された拓夫、必死の弁明です。心は通じるのでしょうか？

第14話 勃つな……！（前書き）

緋菜子に性的な下心を見抜かれてしまった拓夫。罪悪感にうちのみ
されて……。

第14話 勃つな……！

最初から私のコト、そんな目で見てたんだ……

緋菜子の語尾は震えていた。

刺すような視線が痛かった。気圧けおされてしまいそうだった。今すぐこの場から逃げ出したい——心が揺れた。

「ち、ちがう！」

言わなきゃ——そう思った。

「たしかに、俺」

すべてをありのままに——拓夫は緋菜子に告げた。

「たしかに俺、まだガキで、女の人のこと、そーゆー目で見ちゃうつちゃ見ちゃうけど……」

ウソはつきたくなかった。

緋菜子のすべてがほしい——それが本当の想いだった。

「でも、俺、最初に緋菜子さんに会った時、こんなやさしい姉さんが、俺にもいたら——って」

緋菜子は無言だった。

黙ったまま、拓夫の言葉を聞いていた。

「俺、一人っ子だし、親も離婚してるもんだで」

拓夫は打ち明けるように言った。

「それで俺、緋菜子さんに甘えて、はしやぎすぎて……」

言い訳がましい言葉が並ぶ。

何を言っても言い訳になる——それはわかっていた。

それを恥じるようにして、拓夫は緋菜子から顔を背けた。みつともなく声が震え、情けない嗚咽のように響いた。

「だから俺、緋菜子さんのこと」

それは、まるで罪の許しを請う懺悔者の告白だった。

「俺……」

緋菜子はじつとそれを見つめていた。

その非の打ち所のない美しい顔が、足元にはいつくばる年下男の無様な姿を、高みから見おろしていた。

それはゾツとするほど冷たく、それでいて近寄りがたいほど神々しい、聖母のそれを思わせた。

「もう……もう、いいわ、木村くん」

しつとりとした緋菜子の声が、悔悟者の身の上に投げかけられた。許しを与える女主人のように——緋菜子はそつと拓夫の肩に触れた。

「私もちよつと言いすぎたわ……」

「緋菜子……さん……」

拓夫は伏せていた顔をあげた。

まだ「信じられない」といった表情で。

「私だつて」

緋菜子はいくぶん涙で潤んだ瞳を向けて言った。

「あなたのような弟が、ずっとほしかった——」

緋菜子はやさしく拓夫の背中を抱いた。

そして、指先にわずかに力をこめて、拓夫のうなじを引き寄せた。

ひ、緋菜子さん……

美しい緋菜子の顔が、拓夫の肩の上で憩っていた。

さらさらの髪感触、石鹸の香り——

緋菜子さん——！

拓夫はかいなを回すと、荒々しく緋菜子を掻き抱いた。

ゴクリ

大きく唾を飲み込む音が喉を鳴らした。
早鐘を打つ心臓の鼓動——それを緋菜子に悟られまいと必死だった。

いとしさよりも、好奇心が先走る。

女の人のカラダって、こんなにやわらかかったんだ……

それは、新鮮なおどろきだった。

やわらかく、心地よい、この感触——

生まれて初めて体験する、女の人のカラダ。

緋菜子はおどろきに目を見開いていた。

そのまま、なすすべもなく、拓夫の腕に抱かれていた。
声が出なかった。

その甘美さに息が詰まるほど——

胸と胸とを合わせ、二人は信じられないほど長い時間、そのままじっと立ち尽くしていた。

全身の血が逆流するかと思った。

首筋、手首、そして下半身の——全身の血管がいつせいに脈打つのを、どうすることもできなかった。

密着する二人のカラダ——太ももがこすれあい、やわらかな胸のふくらみに、強く性を意識する。

勃^たつな

拓夫はわずかに身をよじった。

それでも、密着したあの部分を離すことはできなかった。

勃^たつな！

緋菜子を抱きながら、拓夫は自分に言い聞かせる。

勃……

触れ合った部分が固く盛り上がり、緋菜子のそこを突き上げる。
拓夫は唇を噛みしめた。

どうしようもない男の性^{さが}が、何かひどく忌まわしく、後ろめたい
ものに思われた。

まわした腕の中で、小さく震える緋菜子を抱きながら――

第14話 終

第14話 勃つな……！（後書き）

緋菜子の前で露骨に勃起してしまった拓夫。止められない男の性……。
次回、拓夫が緋菜子をベットに押し倒して……？

第15話 がまんしないでいいよ（前書き）

密着する二人、拓夫の勃起——気まずい沈黙。

密かに読んでくれる方、ありがとうございますm（——）m
バ
ンダナの恋の行方、見届けてくださいね

第15話 がまんしなくていいよ

二人は抱き合ったまま立ち尽くしていた。

沈黙が、むしろ雄弁に二人の想いを濃密な時間のうちに映し出していた。

勃たっていた。

密着したあの部分が、抑えようもなく脈打つのをどうすることもできずに、拓夫は欲情をありのままにさらけだし、次の緋菜子ひなこの言葉を待つことしかできなかった。

二人分の鼓動が交互に響きあい、不規則に入り乱れる。

それが、ひときわ高く脈打った瞬間、緋菜子は小さく呟いた。

「いい……よ」

拓夫は今にも泣き出しそうな表情で、顔を上げた。

「がまんしなくても……いいよ」

互いのカラダの間に指をすべりこませ、緋菜子は少しだけ距離をとった。

「男の子だもん。勃たっちゃってもしょうがないわ……」

「お、俺、緋菜子さんのこと、カラダなんかじゃないって言うときながら……」

緋菜子の顔を正視することができず、拓夫は唇を噛んだまうつむいた。

「ごめん……」

「ううん」

緋菜子は言った。

「もう謝らないで。木村くんは何も悪くないんだから」

もう一度、緋菜子は指先に力をこめて、拓夫の背中に手を回した。いとしいわが子をなでる母親のように。

「最初からぜんぶ私が悪かったの。私がつとしっかりしていれば

」

ちがう……！

拓夫は緋菜子の言葉を否んでいた。

そうじゃない、俺、緋菜子さんのことが……

「お、俺」

瞬間、膝と膝が交錯し、二人はもつれ合ったままベッドへと倒れこんだ。

首と首、肩と肩を交わしながら――

「木村く……ん！？」

「緋菜子さんのせいじゃない」

緋菜子の上に覆いかぶさりながら、拓夫は声を荒げるようにして言った。

「俺が緋菜子さんのこと、勝手に好きになっちゃったんだで――」
信じられないほど自然に――拓夫の口をついて出たその言葉。
生まれて初めての告白――

本当に、心の底から好きだと叫ぶ、拓夫の――

二人はそのままの姿勢で見つめあっていた。

膝を立て、下半身をよじって距離を保とうとする緋菜子。

上体をわずかに押しのけられた拓夫は、マットに手を突いて、緋菜子の動きを遮った。

見開かれた大きな瞳に映る、情けない顔をした自分――拓夫は思わず目を伏せた。

「緋菜子さん……オレ……やっぱり……」

聞き取れないほど小さな声で、拓夫は「ごめん」と身を離れた。

「それに小口、お茶もってくるって言ってたし……」

取ってつけたような言い訳――緋菜子は黙っていた。

黙ったまま、拓夫の顔をじっと見つめていた。

第15話 がまんしなくていいよ（後書き）

意外とうぶな拓夫。いざとなると自信がもてなくて……。

次回、緋菜子の怒りが炸裂？ 美人相手の恋って大変……（――；

）

第16話 意気地なし……！（前書き）

美人すぎる緋菜子を前に、完全に迫力負けの拓夫。萎えてゆく勇氣……。

第16話 意気地なし……！

拓夫は、緋菜子から身を離すようにして上体を起こした。心が萎えてしまいそうだった。

美しい緋菜子の瞳にすべてを見透かされてしまいそうで。

「意気地なし……！」

不意に発せられた緋菜子の言葉。

凍りついていた心が、再び動き出す。

責めるような視線が、拓夫の顔に突き刺さる。

「それとも、やっぱり」

緋菜子はなじるように言った。

「年上の私のカラダなんか、きたならしくて抱く気になれないんですよ？」

信じられない言葉だった。

きたない——

「はつきり言ったらどうなの？」

「ちっ……ちがう！」

拓夫は、緋菜子の両肩を乱暴にベッドに押しつけた。

きたなくなかない——心から思う。

間近に見る緋菜子のカラダ——失望なんて一つもない。

そんな言葉を口にする緋菜子が悲しくて、同時に何にもまして愛おしかった。

その一言が、拓夫の心を奮い立たせた。

聖母のように目映かった緋菜子が、初めて一人の人間の女に見えた。

コツコツコツ――

コンロにかけた薬缶やかんの音を聞きながら、千佳はコーヒーマーカ―に濾紙をセツトしていた。

木村クン、もしかして今ごろ、緋菜子ねえさんと……

そんな想像の堂々巡り――胸が苦しい。

口づけを交わす二人のヴィジョン――

いや！ あんな女に木村クンをとられたくない……！

これ以上、強めることのできないコンロの火が、もどかしかった。沸騰したことを確かめ、すぐさまそれをポットへと注ぐ――

真実を知るのが怖かった。

でも、あの女にだけは、緋菜子にだけは……！

木村クン――！

盆をもつ手が震えた。けれど、確実な足取りで、一步一步、千佳は階段を駆けあがっていった。

一秒でも早く、緋菜子の部屋に辿りついたかった。

ドアを開けて、何事もないことを確かめたい――

思い出が走馬灯のようによみがえる。

修学旅行の写真、かわいいと言ってくれたあの夜、美容院のこと、服を選んでくれた木村クンの笑顔――

同じ大学へ行こう――そう言ってもらえた時、私、本当に嬉しかった。

その一言を支えに、今日までがんばってこれた。

それさえあれば、あとは何もいらない――そう思えた。

面白いことなんて何ひとつなかった。

家族も、学校も、勉強も……

それでもいい――ずっと思ってた。

自分のために何かをしようと考えたことなんてなかった。

人がこうしてほしいと望むことだけを考えて、そう生きてきた十八年間。

私は何をしに生まれてきたんだろう？

せめてウソでもいい、本気になれる何かがほしかった。
そんな淡雪のような夢——小さな恋。

お姉ちゃん、私から木村クンを取り上げないで——

お願いだから、お姉ちゃん——

第16話 終

第16話 意気地なし……！（後書き）

届かない千佳の想い。急接近する拓夫と緋菜子……！
次回、ついにベッドイン？ 緋菜子と拓夫……。

第17話 舌、入れられちゃった……！（前書き）

千佳の思いをよそに、加速する拓夫と緋菜子の恋。今夜、ついに――
線を……？

第17話 舌、入れられちゃった……！

挑むような緋菜子の目が、拓夫を見つめていた。

気高く、誇り高い、攻撃的な目——それが拓夫の心を試していた。

押さえつけていた両肩を引き寄せ、拓夫は腕を緋菜子の腰へと回し、そのまま一気に唇を押し当てた。

ヘッドのスプリングが大きく軋み、緋菜子は「んっ」と小さく嗚咽を漏らした。

こんなふうにして緋菜子の唇を奪う——まだ信じられなかった。閉じていた目を開け、至近距離で緋菜子と見つめあう。

戸惑いとためらい——息づまるほどのスリル、甘美な駆け引き。先ほどまでの険しさは影をひそめ、緋菜子の眉は、官能的な憂いを帯びて震えていた。

あらがうのをやめた女豹のように——男心をそそる、怯えた瞳。

それからどんなやり取りがあったのか——何も覚えていない。けれど、気がつくと、緋菜子はブラウスの前をただけ、穿いていたスパッツを脱ぎ捨てた姿で、拓夫と向かい合っていた。

その目は、すでに男を受け入れる覚悟を決めた従順な女のそれだった。

緊張した面持ちで、けれども、その目はじつと拓夫の顔をとらえていた。

羽織っていたブラウスを脱ぐと、緋菜子はそつと肩に手を回し、拓夫に身を寄せて抱きついた。

吸い付くような肌の感触——それを確かめる余裕もないままに、拓夫は緋菜子の背中に手を回し、あたりをつけてブラのホックに手をかけた。

初めての体験だった。

どうやってそれを外せばいいのか——それを緋菜子に訊ねるのが怖かった。

そんな小さな見栄——

頭の中が真っ白になる。

気持ちばかりが先走り、次に何をすればいいのか、まるで考えることができなかった。

全身から汗が噴き出すあの感覚、焦燥とパニック——

こうなったら……！

拓夫は緋菜子から身を離れた。

緋菜子は何も言わず、ただ黙ったまま待っていた。

次の瞬間、拓夫は強引に緋菜子のブラジャーをめくりあげた。

かすかな抵抗とともに、形のよい二つの乳房が、拓夫の目の前にこぼれた。

「木村……くん」

緋菜子は動揺した目で拓夫の顔を見上げた。

「緋菜子さん——」

そのまま、こめかみに指を押し当て、拓夫は緋菜子の顔を抱き寄せると、もう一度、勢いまかせに唇を奪った。

「んんっっ」

突然のキスに呼吸を奪われ、緋菜子はあらがうように小さく悲鳴を發した。

荒々しく濃密なキス——溶けたバターのような、それ。

互いの唇を離れた時、二人の口元に唾液の糸が伝った。

「舌……入れられちゃっ……た」

緋菜子は顔を真っ赤にしながら言った。

拓夫はすでに次の行動に移っていた。

緋菜子に覆いかぶさり、その胸元に舌を這わせる——

「木村くん……そんなこと、どこで覚えた……の？」

「ひ…… 緋菜子さんこそ
じゅるっ

薔薇色の乳首を唇に含みながら、拓夫は訊いた。

「男しらねえような顔して、初体験、一体いつだっただ？」

拓夫は緋菜子の身をベッドの上に横たえた。

ほどよく豊かな胸が、餅のようにこぼれて、谷間から左右に流れて波打った。

それが呼吸とともになまめかしく上下して、その間に緋菜子の顔が覗いていた。

緋菜子は、中途半端にめくっていたブラを脱ぎ捨てると、壁にかけた白衣のたもとに、それをよけた。

身につけているのは最後の一枚――

二人はそれだけの姿で対峙していた。

「そうね……」

緋菜子は、先ほどの拓夫の質問に答えて言った。

「初体験は今の木村くんと同じ、高3の時――同じ学年の男の子と……ね」

緋菜子は最後の一枚を脱ぎながら答えた。

大胆だった。

緋菜子は、ためらいもなくそれを脱ぎ捨てると、生まれたままの姿になって、拓夫の前に立った。

「そ…… そうなんだ……」

初めて見る女のカラダに圧倒され、拓夫は声を失った。

緋菜子の高校時代――そんな考えが頭の中をぐるぐると回る。

高3――まだ諏訪にいたころ。

高校生の頃の緋菜子さんって、一体どんな子だったただか？

やっぱり、明るくていい子だったんだろうな――

想像で頭がいっぱいだった。

でも――正直、考えずにはいられなかった。

頭がよくて、自制心の強い緋菜子さんを最初に落した男って、や

っぱスゲーいい男なんだろうな……

ずらりと並んだ書棚の医学書を見ながら、拓夫は気後れしそうな自分を奮い立たせようとしていた。

コンドームの袋を手に、緋菜子は拓夫の傍らに座って身を寄せた。

「最初だから、私がゴム、つけてあげるわね」

「は……はい」

拓夫はわけもわからずにうなずいた。

「あ、あの、その……パンツ……脱いでくれないと……その」

緋菜子は恥ずかしそうに言った。

「は、はあい！」

いよいよ俺、緋菜子さんと……

拓夫はトランクスのゴム紐に手をかけた。

第17話 終

第17話 舌、入れられちゃった……！（後書き）

初めてのえっち。それは本当の恋なのか、それとも若さの……？
次回、千佳登場で修羅場に？ 千佳と緋菜子、壮絶な姉妹対決……。

【りさこのお知らせ】

20話くらいの予定でいましたけれど、もう少し長くなりそうです。
サラッと書いているので、サラッと読みやすければいいのだけれど。
もともと私、心理小説文体なので、苦手な方はごめんなさいm（

ー）m

そのうち、「雨澤流架の小さな胸」という恋愛系小説、R - 15で
アップする予定です。

年齢制限なしの学園系恋愛小説も同時公開できると思います。

今度はちゃんと真面目に恋愛小説にしくっちゃ

第18話 挿れてもいいよ(前書き)

この回、たぶん、R-15のギリギリだと思います。苦手な方は飛ばしてください>(――)<
紺菜子にコンドームをつけてもらう拓夫。いよいよ、初めての……？

第18話 挿れてもいいよ

いよいよ俺、ひなこ 緋菜子さんと――

不思議とためらいはなかった。

何かそうするのが自然なことのように思われ、拓夫は異性の前で初めて最後の一枚を脱ぎ捨てていた。

いちど大きく弾みのついた拓夫のそれ――それを目の当たりにして、緋菜子は息を呑む。

「じゃ……じゃあ、かぶせる……ね」

緋菜子はゴクリと唾を飲み込むと、精子だまりを慎重に押さえながら、拓夫のそれに、そつとゴムをあてがった。

「ここ、空気入らないように……ね」

表面をこすりあげるような指の腹の感触――

ふくらはぎから足の裏にかけて、ツーンと熱いものが走る。

けれど、それはやがてかすかな痛みに取って代わられた。

うつ……なんか、慣れねえと痛え……

でも、このしめつける圧迫感がなんか快感に――！

「くすつ、痛かった？」

緋菜子はゴムを茎のほうへとかぶせながら、拓夫の顔を見た。

「い……いえ……」

拓夫は小さく首を横に振った。

「そして、最後にこれを」

緋菜子の指先に力がこもる。

「ねもこ 根元まできちんと下げて……えいつぎゅっ

「うつ！」

びくんっ

反射的に大きく跳ね返る、それ。

「きゃっ、うごいた？」

緋菜子は両手でそれを押さえると、細い指先でそれをしっかりと握り、きちんと付け根まで押し下げた。

「簡単だけど、しつかりやらないと……ね」

緋菜子は女医らしく微笑んだ。

拓夫の顔にようやく笑顔が戻った。

や……やっぱ、オナニーとちがって、他人にしてもらうのって、気持ちいいだな……

ただそれだけのことが、ひどく贅沢なことに思われ、今の時間がひとしお愛しく感じられた。

「あ……あの、これでホントに……挿れちゃっていいんです……か？」

拓夫は言いにくそうに訊いた。

自分でも何を言っているのか、よくわからなかった。

緋菜子は両膝をベッドについたまま「くすっ」と笑った。

「私のなんかでよかったら、挿れてもいい……よ？」

その言い方が、たまらなく愛しかった。

「千佳みたいな若い子とはちがって、あまりきれいじゃないかも知れないけど……後悔しても知らないからね？」

「そんな、関係ないっすよ！」

くりかえし、拓夫は緋菜子の言葉を否定した。

そうすることが愛の表現だと思った。

他に何も思いつかなかった。

そう、ただ一つの——一途で、そして単純な——その思いこそが愛なのだと、一片の疑いもなく、そう思った。

階段を駆ける千佳の足音——拓夫には聞こえない。

木村クン、だまされないで——届かない千佳の想い。

机の上に伏せておいたはずの修学旅行の写真——

それは、気づかないうちに元通りに立てかけられていた——そ

の事実。

あの女、私が木村クンのこと好きだと知ってて、わざと――

「最初だから、正常位にしようね」

膝をくずして座り込んだ緋菜子が、誘う。

「あ……はい……それって、男が上のやつずら？」

拓夫も膝について緋菜子と両手を合わせる。

それだけじゃない――千佳の叫び。

お姉ちゃん、勝手に合鍵を作って、引き出しの中にエッチな本を――

「い……挿れる……よ？」

あの部分を合わせながら、拓夫はもういちど緋菜子の指を握りなおした。

「いーよ……きて、木村……くん」

切ない吐息に胸を上下させながら、緋菜子が答える。

「緋菜子っ！」

パン　パン　パン

肉と肉とがぶつかりあい、叩きつけられる音――

「あっ」

緋菜子があえぎ声をあげ始める。

くりかえされる単調な上下運動。

けれど、やがてそれは一回ごとにリズムを増し、熱く、強く、二人を絶頂へと押し上げてゆく――

ほとばしる汗と愛液が二人の頬に飛び散り、真っ白なシーツをぐっしょりと濡らしていた。

木村くん、だまされないで！

千佳は叫んでいた。

あの女はちがうの！

私のこといたぶって面白がっている、そんな変態女なの！

緋菜子は——！

間に合って、木村くん——

最後にもういちど心の中でそう叫ぶと、千佳は緋菜子の部屋のドアに手をかけた。

おねがい！

緋菜子となんか……緋菜子となんか——

第18話 終

第18話 挿れてもいいよ（後書き）

幸福と快感の絶頂にいる二人。そこに駆け込む千佳……。次回、千佳の想いが爆発！？ 壮絶な姉妹の戦い！

【りさこのその他の作品】

『エステル・アシュケナージのおうち』（全年齢）

12歳の天才美少女エステルをめぐる悲しい事件に、28歳の女性教授みらの先生（独身・処女）が挑みます。一夜の恋の行方は……？
その他はR・18なので、ご案内は控えさせていただきますm（――）

第19話 もう許さない！（前書き）

ついに緋菜子と——拓夫の想いは最高潮に……。

とりあえず、まだR・15の限界ギリギリの描写が続くので、苦手な方は飛ばしてくださいね、ごめんなさいm（——）m

第19話 もう許さない！

おねがい！

緋菜子ひなことなんか、緋菜子となんか――

迷いを吹っ切るようにして、千佳は目の前の扉を開けた。

そう、きつと何も起こってなんかいない。

見慣れた緋菜子ねえさんの部屋、壁には白衣がかけてあって、本棚には分厚くてむずかしい本が――

そこで木村クンとお姉ちゃんが向かい合って、私の学校生活を話の種にして、楽しそうに笑いさざめいて――

ガチャ

千佳はノブを引いた。

乳白色の照明に眩惑され、千佳は一瞬、視界を失った。

次第に戻ってくる視力――

「お……小口……！？」

拓夫が声を上げる。

千佳は右手で口元を覆った。

盆ごと床に叩きつけられたコーヒークップが、不自然なほど甲高い音をたてて、砕け散った。

拓夫の上に覆いかぶさる、全裸の緋菜子――

千佳に振り向こうともせず、むしろ、二人の結合部を見せつけるかのようにして、尻を一段と高くもちあげてみせる、姉の姿――

脚と脚をからめあったまま、拓夫は緋菜子の左の乳首を唇に含んでいた。

自然に目があの部分にいく。

き…… 木村クンの…… あの女のアソコに刺さってる……

見なければよかった——— そう思う。

でも、目をそらすことができず、千佳は立ち尽くしていた。

イヤ!!

次第にぼやけてゆく視界——— あふれでる涙を振り切ろうとして、強く瞼を閉じる。

こんなの、やだあ——— !!

金縛りにあつたような自分。

緋菜子は拓夫と体を入れ替え、完全に馬乗りになると、背筋をピンと立て、それを突き立てたままの拓夫にむかって、垂直に腰を下ろした。

ズブツ——— 最後のひとこすり。

拓夫の口から「あつ」という呻きにも似た吐息が漏れた。

「ちよつと、千佳。あなた、なにじつと見てるの」

緋菜子は、怖ろしい目で妹を振り返ると、不快さを隠さずに言った。

子供の出る幕じゃない——— その目はそう言っているようだった。神経のささくれが、一気に逆立った。

「もう許さない!!」

次の瞬間、千佳は絨毯の上に寝かせてあつた猫のぬいぐるみを手に、猛然と緋菜子に詰め寄っていた。

「あんたなんか…… あんたなんか——— !!」

「千佳!？」

のけぞつた緋菜子は、拓夫から身を離して、ベッドに尻餅をついた。

中に詰められた綿がボロボロにはみ出して、あたり一面に飛び散るほどの勢いで、千佳は何度も何度も緋菜子の頭を叩き続けた。

緋菜子は、みっともなくうろたえて、必死で顔を覆っていた。

「お、小口、おめ、一体どーしただ！？　こんなカツコで悪いけど」

右手であの部分隠しながら、千佳に触れるわけにもいかず、拓夫はあたりをうろろろするばかりだった。

「どいて木村くん！　この女は……この女は……！！」

ピシヤッ

頭を激しく振って、すべてを否もつとする千佳の頬に、緋菜子の平手打ちが飛んだ。

「あっつ！！！」

「小口！」

拓夫は思わず叫び声を上げた。

千佳は、ぶたれた頬を押さえながら、絨毯に倒れこんだ。

第19話 終

第19話 もう許さない！（後書き）

ついに爆発した千佳の想い。当然、緋菜子是不愉快に……？

【りさこの次回予告】

今度、緋菜子の高校時代を描いた『ガラスのヴァイオリン』というお話を書こうと思っています。

その前に、実はこのバンドナの話って、大学編もあるんです。けど、このまま連載すべきか「2」にすべきかで迷ってるんです。どうしたらいいですか？

第20話 そんなに緋菜子がよかったの？（前書き）

緋菜子と拓夫がしてる現場に居合わせてしまった千佳……。

今回もR・15の上限近くの描写が続きますから、申し訳ないので
すけど、苦手な方は飛ばすようにして下さいね。ごめんなさいm

——）m

第20話 そんなに緋菜子がよかったの？

「うるさいわよ、千佳」

千佳をぶつた緋菜子ひなこの手が震えていた。

千佳の前に立ちふさがるようにして、緋菜子は妹をにらみつけた。
「大人しく部屋に戻ったらどうなの？」

「やだもん！！ もう、おまえのいいなのになんか、ならないもん
！！」

千佳は、よろよろと起き上がって叫んだ。

や、やべ……俺……

拓夫は、半歩あらずさつて露出した前を隠した。

ドクツと何かが脈打って、突き抜けるような疼感が、すーっと大きく間をおいて走った。

ど、どうしよう、で、出ちゃ……

「あ、そう。それならそれでいいわ」

緋菜子は、首がもげて目玉の飛び出したぬいぐるみを一瞥すると、
白衣を手にとつて、またぐようにして椅子stuhlに腰かけた。

「そんなに見たかったら、見てけばいいわ。私と拓夫のセックス」

「んっ？」と確認するような目で千佳を挑発すると、緋菜子は脚
を組みなおし、右手にもった白衣を颯爽と肩に羽織った。

千佳は何も言い返すことができずに黙り込んだ。

そして、わずかな望みを託して、拓夫の顔を振り返った。

「お……小口……」

こっち向くなよ……

拓夫の目はそう言っているようだった。

指先からこぼれてはみ出したそれが、一度「びくん」と上下した。
あっ……

千佳は思わず目を閉じた。

木村クン……

拓夫の体が「ぶるっ」と大きく震えた。

あ——

ピンク色のゴムに覆われたそれが、規則的なリズムで伸縮をくりかえす。

ひどく筋張った茎が、白いものをすべて吐き出そうとするように

——それは、激しい前のめりの運動をくりかえしていた。
がまんしきれなかったか……

緋菜子のため息。

千佳は半ば呆然とそれを見つめていた。

男の人が射精してるとこ……はじめて見ちゃっ……た……

みるみる白濁してゆく先端部——たまってゆく拓夫のそれ。

お、小口の前でやつちまった……と、止まれーっ！！

拓夫はなすすべもなく、ぶざまな姿をさらし続けた。

不思議と千佳は冷静だった。

木村クン、そんなに緋菜子のカラダがよかったの？

目の前でくりひろげられる異様な光景——どこか現実感のない、
別世界の出来事のように思えた。

木村クン、あたしのことなんか見てくれないだか？

目の前のそれはまだ動いていた。拓夫の意思とは無関係に。

千佳はそれに背を向けると、半歩、ドアの前に足を踏み出した。

「おやすみ……木村……クン」

「おっ……小口っ！」

最後に大きくはねあがったそれを隠そうともせずに、拓夫は千佳の
後を追った。

ガチャン——

それを拒むようにして、閉められた部屋の扉が、二人の間を隔て

た。

小口……

釈明の機会を奪われた拓夫は、絶望的な目でそれを見つめた。

「気を悪くしないでね、木村くん」

背後から緋菜子が声をかけた。

「ふだんは大人しい子なんだけど、たまにああなっちゃうの、千佳
つて」

緋菜子は顔を曇らせた。

「今日はあの子にきつい言い方しちゃったけど、あの子にも悪気はないの。それだけは……」

「あ、はい。わかってます。大丈夫です」

拓夫は答えた。それしか言うことができなかった。

「あ……」

緋菜子はハッと気づいたように言った。

「そういえば、出ちゃったんだよね……。ごめんっ、早くとらないと気持ち悪いよね」

しんなりと萎縮したそれを見て、緋菜子は気まずそうに言った。

「え…… あっ、す、すいません……っ」

「すごい……こんなにたまってる」

目の前にぶら下げられたそれを見て、拓夫は、ばつが悪そうに目を背けた。

「は、早く捨てましようよ、それー!？」

「意外と恥ずかしがり屋なんだ、木村くんって」

緋菜子は「くすっ」と意地悪く笑った。

「なんか、自分のつて見るの、やなんだわ……」

くず籠に投げ捨てられたそれを見送りながら、拓夫は思った。

でも、こんなきれいな緋菜子さんの部屋に、俺のばつちい精子を残してくなんて、ちよつと犯してるっばくて、そそるだな――

いらなことを考えているうちに、ムクムクと元気づく拓夫のそれ――

「やだ……もう勃^たってるの……？」

緋菜子は跪いて拓夫のそれに顔を近づけた。「くんっ」と鼻を鳴らすと、そつと右手を添えてそれに口づけする――

「あつ……緋菜子さん、それ」

「あつ……ごめん、こういうの、嫌いだった？」

緋菜子はあわてて顔を離すと、上目遣いに拓夫の顔を見た。

「そ、そんなことないっすよ！　き……気持ちいいよ」

拓夫は緋菜子の前に腰を突き出した。

「私のコト、変態だと思ってるでしょ……？」

上唇の裏側で先端を軽くくわえこみながら、拓夫に問いかける緋菜子。

「そんなこと全然ないだだ！！　オレだって、オレだって……」

「……ホント？」

荒い息に胸を上下させながら、緋菜子が訊き返す。

「オレだって、緋菜子のアソコ……なめたいもん……！」

口をすぼめて拓夫のそれを頬張る緋菜子。

男を喜ばせようとする扇情的な眼差し――

もう、やめて……！！

扉の向こう側で耳をふさごうとする千佳。

「やだ……恥ずかしいよ」

胸が悪くなるほど甘ったるく響く緋菜子の声。

「あつ……緋菜子だって、アソコ、濡れてんじゃん」

下の名前で呼び合う二人、交わされる濃密な愛の言葉――

壁一枚を隔てた向こう側で、二人が今なにをしているのか――
そう考えるだけで気がヘンになりそうだった。

おねがいだから、もうやめて、お姉ちゃん――

第
2
0
話
終

第20話 そんなに緋菜子がよかったの？（後書き）

次回、自慢げに緋菜子との初体験を吹聴するバンドナ……ガキ……
ですよ（――；）

第21話 緋菜子さんとやっただ！？（前書き）

夢のような一夜。その余韻を漂わせながら登校したバンダナですが……。

第21話 緋菜子さんとやっただ！？

翌日、湖畔高校――

物理の授業前、ひとり階段教室でキーボードをはじきまくるボク。
「うおーっ、こないだの実力考査の数学、オートリグレーション移動平均方式でも解けただかーっ！？ てっきり従来の線形構造の…」

真理の探究に余念がないボクの背後で、いつものダークマターの気配がした。

「メガネー、実は昨日……うふふ」

「なっ……何ですか、その優越感にひたりきったような顔は！？」
ゆらりとあらわれたバンダナの表情を見て、ボクはすんごく嫌な気分にかられた。

「実はな……」

バンダナは昨晚の出来事を語り始めた。

「えゝっっ！？ ひ、緋菜子さんと、や、やっただー！？」

「バカ、声でええだぞ」

「バカな、バカな、バカだだだ！？」

ボクは動揺して何度もメガネを上げ下げした。

「いや、そしたらよ、小口がよ、かくかくしかじかだよオー」

「ふーん、なるほどね」

ボクはどうにか落ち着きを取り戻して言った。

「つまり、緋菜子さんが小口さんに意地悪してるって、小口さんは言ってるだら？」

（なぜか

三河弁 っ）

「ん、まあ、何かの勘違いだと思うけどな」

階段下の教卓の前で、バンダナは腕を組んだ。

まあ、なんにしても、これで小口さんも目が覚めただな。

あんなバンダナのことなんて……

その時、ガラガラという音がして、入口の扉が開いた。

「んっ？」

入ってきたのは、ポロ風のライトグレーのニットトップにデニムパンツの女子生徒——小口さん！

「お……小口さん！？」

「な、なにい！？小口い！？」

噂の主の登場に、動転するボクたち。

「木村くん……昨日はごめんなさい……」

ドアを後ろ手に閉めながら、彼女は緊張した面持ちでバンダナの顔を見た。

「ああ……それよか、おめこそ大丈夫か？」

ばつの悪そうなバンダナの表情。心もち目が泳いでいる。

「あの……木村……くん」

小口さんが歩み寄る。その距離がみるみる縮まって、バンダナは気圧けおされたように胸をのけぞらせた。

「な、なんだだ、小口？」

「聞いてほしい話があるの。二人だけで……」

二人だけえー！？

頭をガンと殴られたような衝撃——

小口さん、バンダナ相手に何を言ってるだか！？

「いいずら……？」

覚悟したような彼女の目が、バンダナの顔をとらえていた。

バンダナの顔から曖昧な笑みが、すーっと引いた。

「ああ」

その短い返事が、ガランとした物理教室の天井に、吸い込まれて消えた。

第
2
1
話
終

第21話 緋菜子さんとやっただ！？（後書き）

千佳に呼び出されたバンダナ。いったい何の話が……？

次回、千佳の口から語られる緋菜子の真実。そこに意外なキーパーソンが……？

第22話 千佳の心（前書き）

バンダナを呼び出した小口さん。一方、メガネくんは……。

第22話 千佳の心

くっそおー、なんでいつもバンダナばっか女性の関心を集めるだ？
心の中でブックサ言いながら、ボクは廊下を歩いていた。

別に女とやっただの、セックスだの言ってる奴の程度なんて知れてるけど……バカバカしい。

でも、ここいらでボクの有能さを思い知らせておく必要があるだな。

——てなコトを考えながら、ボクは英研の扉を叩いた。

「失礼します。花岡先生、あのー、浜ですけど」

「あら、浜くん。英研に用なんてめずらしいわね」

担任の花岡由記子先生——前に起きたちよつとした出来事（

パンツ事件）を思い出し、ボクは思わず目を泳がせた。

「浜くん、今日はなにかしら？ この前まとめた重文と複文の書き換え問題のことかや？」

「あ、それなら去年、予習でマスターしときましたんで……等位接続詞と従属接続詞のアレでしょ？ butとかthoughとか…

…」

「……そ、そう……さすがね、浜くん（かわいくないわね……）」

（てか、この時期にこんな勉強していて大丈夫なのか！？）

「ところで先生、この写真なんですけど」

ボクは、そのままの勢いで、自宅のプリンタで印刷した例の画像を手わたした。

「この人、知ってるずら？ 先生の高校時代の同級生だった人だと思っんですけど」

「……もしかして、この写真……」

花岡先生の顔色が変わった。

「これ、もしかして緋菜子……？」

先生は確かにそう言った。

その表情は、いつになくけわしかった。

* * * * *

「——小口、おめ、それマジで言ってるだか？」

肌寒い秋の風に吹かれながら、二人は屋上で向かい合っていた。

「それじゃ、おめえは、緋菜子さんがおめに嫌がらせをするために、俺と寝たつていうだか!？」

「ごめんなさい……でも！」

拓夫を傷つける罪の意識にうちひしがれながら、それでも千佳は勇気をふりしぼって言った。

「あの女は……緋菜子は……」

言えは言うほど、自分が惨めになるのはわかっていた。それでも、いちど口をついて出た言葉を、今さら呑み込むことはできなかった。

「緋菜子は私の部屋を勝手に調べて、私のコトなんでも知って……それに無断で合鍵を作つて、机の中にいやらしい本をしのばせておいたり……！」

押さえつけていた感情が、一気に爆発する。

「それに……私がお茶もつてくるの知つてて、わざと私の目の前で木村クンを……木村クンを——！」

あの晩の光景がよみがえる。

私をいたぶるためなら、妹の前でだって裸になる恥知らずなアイ

ツ——緋菜子！

「あたし……あたし……！」

涙があふれた。

どうして？ どうして涙なんか……

拓夫は呆然と立ち尽くしていた。

この数日、初めて千佳が見せる激しい感情——

その生の感情に、拓夫は圧倒なまされていた。

「だ……だけど、小口……」

落ち着いた頃を見計らって、拓夫は千佳に訊いた。

「なんで緋菜子さんが俺と寝ることが、おめへの嫌がらせにつながるだ？」

「そ……それは……」

先ほどまでの激した態度がウソのように、千佳の目に狼狽の色が浮かぶ。

「言わなきゃダメよ、小口さん！」

叱咤するような女性の声――

千佳は思わず声のするほうを振り向いた。

「は、花岡先生……！ それに、浜くん？」

「あなた、誰のためにコンタクトにして、髪形も変えてきれいになったの？」

花岡先生の言葉。

先生……

先生はちゃんと知っていた。私の気持ちをぜんぶ……

先生は私のことを見ていてくれた。

先生だけが……

「ちゃんと口に出して伝えなきゃ、いつまで経っても想いは届かないわ」

千佳は、胸の鼓動に抗うようにして、目を閉じた。

唇が何かを言い出そうとして震えていた。

小口、まさか、おめ――

拓夫が言いかけた、その時だった。

「好き……！」

涙とともに発せられたその言葉――

がんばれ……！

花岡先生の目が、そう言っていた。

「お……小口……？ そんな」

それ以上、何も言うことができず、拓夫は戸惑いもあらわに千佳の顔を見つめた。

「ずっと……ずっと木村クンのことが好きだった……！」

こぼれ落ちた涙が、きよらかな晩秋の陽光を受けて、真珠のように輝いた。

「だから、同じ大学うけようって言われた時、とてもうれしかったし、美容院へ行っておしゃれして、“かわいい”って言われた時、これで少しは振り向いてもらえるかもって期待してた」

身を切るような告白——思いのたけを、すべて吐き出そうとするように……。

「だけど……」

「……」

さらけだした裸の心。

すべてを脱ぎ捨てた千佳の心……

裸になるよりもつらく、苦しい告白——

そんな、まさか小口が……

いたたまれなかった。

だとしたら、俺のしてきた事って……

俺……

第22話 千佳の心（後書き）

ついに本当の想いを告白した千佳。そして、花岡先生と緋菜子の過去……。

次回、小口緋菜子VS花岡由記子の同級生バトル！ 大人の女の壮絶な戦い……！

【りさこの次回作予告】

バンドナの大学編、めんどいので「恋ひな2」ってことで、やらせていただきますねm（――）m
でも、みんなが大好きな緋菜子さんは出てこないのよ……「ごめんなさいm（――）m

で、恐怖の美人女医・小口緋菜子の高校編は「ガラスのヴァイオリン」という題で書きますね>（――）<
私、小口緋菜子って大好きなんです、なぜか……（現実にといたらやな女）。

第23話 花岡先生の決意（前書き）

千佳の告白を聞いてしまった拓夫。そして明かされる、緋菜子の過去……！

第23話 花岡先生の決意

「木村くん」

由記子ゆきこ（「すみません、花岡です……けど」）の聲が、沈黙の時を破った。

「小口さんの言ったこと……私もその通りだと思うわ」

「は……花岡ちゃん……」

「あなた、その呼び方、いーかげんにやめてくれないかや？」

由記子は手にした出席簿でペシペシと拓夫の腕を叩いた。

「もう、これ見て知ってるとは思っただけど」

由記子が差し出したのは、進路指導室で見た『思い出のアルバム』

拓夫は、わけもわからずにそれを受け取った。

「私、小口おくち緋菜子ひなことは同級生だったの」

「あー、そう言えば……！」

今さらながらによみがえる記憶。

そうだ、あのとき見た緋菜子のページに、黒髪を二つに分けて三つ編みにした目立たない女子生徒が——花岡先生の写真が一緒に載っていたつけ——

花岡先生がお姉ちゃんの……！？

初めて聞く事実——思わずアルバムを覗き込む、千佳。

「そう」

由記子は力強く言った。

「だから、あの子のことなら誰よりも知っているの。親友……だったから」

三人を正視する由記子の目。

その場の空気をさえ変えてしまうほどの、説得力に満ちた眼差し

その時だった。

パラララッ、パッパッ、パー♪

「な……何？　今のドラQのレベルアップの音……は？」
おどろいて周囲を覗うメガネ。

「メ……メールだよ」

拓夫は画面を開くと、文面を読み出した。

「これ……緋菜子からね」

「ちよっ……花岡ちゃん！」

横から強引に覗き込む由記子。
メールにはこうあった。

今夜、お食事でもどう？

夕方6：30に、この前のレストランで待っています。

緋

菜子

由記子は無言のまま画面を閉じると、それを拓夫に手わたした。
決意のみなざるその横顔が、凜として美しく見えた。

第23話 終

第23話 花岡先生の決意（後書き）

緋菜子からのメールに、拓夫は……？

次回、いよいよ由記子が緋菜子と激突？ あばかれる小口緋菜子の

素顔……！

第24話 プライド……！（前書き）

いよいよ激突！？ 英語科教諭・花岡由記子VS美人女医・小口緋菜子……！

第24話 プライド……！

夜――

店のオーナーやシェフの代わる代わるの訪問を受けながら、ひな緋菜子はひとり席について、拓夫が着くのを待っていた。

いつになく上機嫌に見える緋菜子――ホッと胸をなでおろし、恭しくその場を離れてゆく店の面々。

不意に目の前を誰かの影がよぎった。

「あら、遅かったわね、木村く……」

言いかけたその時だった。緋菜子の表情が、わずかに動いた。

「あなた……由記子！？」

「久しぶりね、緋菜ちゃん」

予期せぬ再会におどろきをあらわにする緋菜子――

だが、やがていつもの取り澄ました表情に戻ると、口元に不敵な笑みを浮かべて、由記子に答えた。

「そうか……千佳がチクったのね……。なかなかやってくれるじゃない、あの子も」

「違うわ。彼女はそんな子じゃないわ」

そう言うと、由記子は向かいの席について、緋菜子と向き合った。「それにしても由記子」

緋菜子はさげすむような目で言った。

「あなたって相変わらず地味系なのね。ふふっ、かわいっ」

「あら、緋菜ちゃんこそ」

由記子はひるまずに言った。

「もとから派手な顔立ちなのに、これ以上、派手にしてどうするの？」

「くっ……！」

緋菜子の顔色が変わった。怒りに紅潮する両頬――

「そうまでして男にもてたかっただ？」

挑むような由記子の言葉。緋菜子の体は怒りに震えていた。眉間に皺が寄り、口元から見下したような薄笑いが消えた。

「ふっ、なるほどね」

緋菜子は自身を落ち着かせるように、大きく息を吐き出すと、もういちど唇に薄い笑みを貼りつけて、その先を続けた。

「高校時代、あなたが好きだった人と私がいい関係になった恨みを、今ここで晴らそうっていうわけね」

緋菜子は勝ち誇った目で由記子の顔を見た。

「凶星……でしょ？」

しばしの沈黙の後、由記子の唇が動いた。

「昔のコトなんて、もう、どうでもいいいら？」

由記子は、過去の傷をえぐり出そうとする緋菜子の思惑を一蹴するように言った。

「それよりも、緋菜子。私にした嫌がらせを、実の妹にもするなんて、あなた、ちょっとひどいんじゃないの？」

「妹？」

緋菜子の表情が動いた。

フツと軽いため息をつく緋菜子――

やれやれといった表情で、緋菜子は言った。

「あんな子、妹でもなんでもないわ」

今度は由記子の表情が動いた。

「あんな愚図でノロマな子が、私の実の妹なわけないでしょ？」

禁断の一言――言い終えて、いくぶん目に動揺の色を浮かべる緋菜子。

「緋菜子……あなたって人は……！」

「たしかに、私と千佳は同母姉妹よ」

緋菜子は打ち明けるように言った。

「だけど、私には小口の血は一滴も流れてはいないの」

初めて聞く緋菜子の生い立ち――由記子は押し黙った。

「十九年前——私が七歳の時に母が再婚したの。私は母の連れ子として、小口の家に入ったの」

七歳の緋菜子——母に手を引かれてゆく天使のような少女——
—そんな情景が目には浮かんだ。

「しかし、私は小口の家には溶け込めず、母だけが唯一、心の支えだった」

母だけが——緋菜子はその部分をくりかえした。

「それから一年後——あの子が生まれた。最初は初めての妹がとてかわいく思えた」

今にも泣き出しそうな緋菜子の目——緋菜子は震えていた。

「でも、やがて母の私への愛が冷めてゆくのがわかった。私は一人ぼっちになったの」

由記子は黙ったまま緋菜子の告白を聞いていた。それは初めて聞く親友の告白だった。そう、かつての親友の……

「中学にあがる頃までは、自分を責めていたわ。私が愛されないのは、私自身が悪い子なんだからってね」

耳にかかる美しい栗毛をよけながら——緋菜子の表情に、いつもの傲慢さがよみがえる。

だが、次の瞬間、その悪戯な表情が、一変して険しさに歪んだ。

「でも、やがて気づいたの」

緋菜子は語気を荒らげて言った。

「私と千佳の間にある差別は、私のせいなんかじゃないってことにね」

手にしたナイフを皿に下ろすと、緋菜子は横目に由記子を見ながら、底意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「だって、すべてを完璧にこなしている私より、わがままでウスノ口の千佳のほうが愛されてるなんて、どう考えても不公平でしょ？」

緋菜子は吐き捨てるようにそう言うと、最後に「くすっ」と鼻で笑った。

「……だから、千佳さんに嫌がらせをしたってどういうの？」

それまで黙っていた由記子が、口を開いた。

「嫌がらせ？　ぷっ、バカ言わないでよ、由記子」

緋菜子は開き直るようにつて言った。

「あれは木村くんの自由意志よ」

緋菜子はもう一度「くすっ」と小馬鹿にするように笑った。

「彼は自分の意思に従つて、千佳なんかじゃなく、私の顔とカラダを選んだのよ。そのコトは、あなたも高校時代に体験済みでしょ？」

小泉くんつていったかしら、彼——緋菜子は、由記子の前でぬけぬけと男の名を言つてのけた。

「緋菜子」

由記子は目を背けずに言った。

「あなたは、いつだつてそういうふう^{はかり}に人の心を秤にかけることしかできないのね」

その一言に、緋菜子がキレた。

「そうよ。しよせん私は不幸な女よ。だけどね……！」

大声を上げて立ち上がる緋菜子を見て、何か料理に落ち度があったのではと血相を変えて飛んでくる店の面々。

緋菜子はあたりかまわずにわめきちらした。

「言つておくけれど、由記子や千佳のほうが、もつとみじめな人間だつてこと、忘れないでよね！？」

歯をむき出しにし、こめかみに青筋を立てて由記子をにらみつける緋菜子。

「容姿だつて服のセンスだつて、地位や学歴だつて——みんな私のほうが上なの！　今だつて向上心を忘れたことはないし、努力だつてしてる。将来だつて約束されてるの！」

緋菜子は自らを落着かせるようにそう言つと、再び席についてワイングラスをあおつた。

「その気になれば、私には手に入らないものなんて何も無いの。それを証明したまよ。あなたたちみたいに、幸せのハードルが低い人たちには、わからないでしょうけどね！」

無反応な由記子に苛立ちながら、緋菜子はすべてをぶちまけていた。

「いえ、よくわかったわ」

由記子は顔色を変えずに答えた。

「あなたが、他人の幸せに嫉妬してるだけの、コンプレックス丸出しの子供じみた女だってことがね」

「なっ……！？」

緋菜子の顔があわれにもひきつった。

「これで私も、二度とあなたと比べて自分がみじめだなんて思わないわ」

ビシャッ

その瞬間、由記子の顔に浴びせられたグラスの赤ワイン――

由記子はわずかに顔を背けたが、その目は発止はっしと緋菜子の顔をとらえていた。

緋菜子は震えていた。

荒い息に肩を上下させながら、今にも泣き出しそうな顔で。

そのプライドだけが、くずれそうな体をどうにか支えていた。

第24話 終

第24話 プライド……！（後書き）

ここまでくると、どっちがかわいそうなのやらわからない、あわれな緋菜子……。

次回、女の修羅場にバンダナ登場？ 緋菜子との関係に決断の時が……

第25話 さようなら……！（前書き）

由記子にワインを浴びせた緋菜子。そのプライドは傷ついて……。

第25話 さようなら……！

由記子ゆきこは無言だった。

したたるワインもそのままに、テーブルに左手をついて立ち上がった。

「ひなこ 緋菜子」

「なによ？」

刹那、由記子の右手が高々と掲げられた。

パシーン！

「きゃっ」

やにわに振り下ろされた平手に、緋菜子は悲鳴とともに椅子から転げ落ちた。

「ひ…… 緋菜子さま！？」

足元を転げてゆく緋菜子を見て、給仕きゆうじが声を上げる。

「ちよっ…… なんざます、この人は！？」

上流ぶった婦人たちの蔑むような眼差し――

白い太ももあらわに、緋菜子は来客たちの足元に這いつくばり、人々の好奇の視線にさらされていた。

「今の見たか、おめさん」

「いや、白ずら、白、眼福、眼福」

最近の子はいい尻してるだな――そんなスケベオヤジの声を聞きながら、緋菜子はよろと身を起こし、めくれたスカートの裾を押さえた。

くっ…… オヤジどもが……！

真っ赤に濡れた目が、屈辱に震えていた。

腫れあがった左の頬を髪の毛で覆いながら、どうにか体を起こす

その時だった。

目の前に差し伸べられた誰かの手――

緋菜子はハッとして、その先をなぞるようにして目で追った。

「木村……くん……！」

「……緋菜子さん」

いつかとは反対に、苦悶に満ちた拓夫の顔が、上から緋菜子を見おろしていた。

「全部……見てたの……ね？」

「う……うん」

拓夫は覚悟したようにうなずいた。

差し出された手には触れずに、緋菜子は両手を床について顔を背けた。

「ののしりたかったら、ののしればいいわ。いい年して八歳も年下の高校生に欲情した淫乱女だってね……！」

拓夫はまっすぐ緋菜子の顔を見つめていた。

緋菜子はそのままの姿勢で、視線を床に落とした。

最後まで悪女のまままでいさせて――

そんな心の叫びを聞いたような気がした。

「そんなことないよ」

拓夫の口が小さく動いた。

「あの夜の緋菜子さん、とてもすてきだった」

え……？

緋菜子は伏せていた顔をあげた。

「ホントに楽しかった……ホントに……」

拓夫の目から光るものが落ちた。

緋菜子の顔から陰しさが消えた。

まるで子どものように――緋菜子はあどけない表情に戻って、

拓夫の顔を見つめていた。

「俺さ……勉強して上諏訪大へ入るよ」
かみすわ

拓夫は緋菜子に告げた。

「緋菜子さんからもらった赤本で、千佳と一緒に——」

「木村……くん……！」

緋菜子の呼びかけに、拓夫は答えなかった。

無言のまま立ち上がり、拓夫は緋菜子に背を向けた。

「さようなら」

最後の一言が、重く響いた。

緋菜子は呆然と、その後ろ姿を見送った。

そして、しゃくりあげるように、いちど大きく胸を上下させると、思い出したように泣き始めた。

両手で顔を覆い、悲しみに身を震わせながら——

その無垢な少女のような緋菜子のかたわらを、両手に皿を抱えた給仕が、無言のまま通り過ぎていった。

切ない恋の終わりが、冬の訪れを告げていた。

第25話 終

第25話 さようなら……！（後書き）

残されたわずかな救い——子どもに戻ったような緋菜子の心。
次回、生まれ変わる千佳の門出。絶頂の彼方へ……！

第26話 生まれ変わる私（前書き）

緋菜子に別れを告げた拓夫。そして今夜、千佳のもとへ……！

第26話 生まれ変わる私

すぐ近くで時報が鳴った。

千佳は、三角屋根の時計台を見上げた。

時刻は夜の七時——約束の時間。

木村クン、本当に来てくれるのか？

そう考えると、心細くなる。

緋菜子^{ひなこ}ねえさんに夢中の木村クン——

考えてみれば、今までに一度だって何かでお姉ちゃんに勝ったことなんてなかった。

そんな私が、木村クンと……

「よっ、小口」

その声に、千佳は振り向いた。

「木村……クン……」

「悪かったな、待たせちゃってよ」

ハアハアと息をはずませながら、右手を挙げてみせる拓夫——

木村クンが来てくれた……夢じゃない！

胸がドキドキする。

こんな私でも、願えばきつと夢はかなう——

そう信じて、背伸びしてきた昨日までの私。

でも、こんなことが、まさか本当に——

「よーし、小口、目え閉じろや」

拓夫はいつになく落ち着かない様子で言った。

「えっ……えっえっ！？」

「バ……バカ！！ わかってんずら！？」

戸惑う千佳に、真っ赤な顔で目配せする拓夫——

「う……うん……！」

千佳の顔に、満面の笑みが咲き誇った。

こんな夢のようなことが、こんな私みたいな女の身の上に降りそそぐなんて——それも、こんな悲しみばかりのつらい世界で！

涙があふれた。

私は一人なんかじゃない——今ならそう思える。

でも、誰かが私を暗闇から救い出してくれなければ、私はずっと一人でつらい思いを引きずったまま生きていかなければならなかったと、そう思う。

けれど、これからは二人で——

木村クンとなら、この先も私は生きてゆける。きつと——

二人の唇が重なった。

時が止まったようだった。

十秒——いや、もっと。

「ごめんな、つらい思いばかりさせて」

いつもとはちがう拓夫の眼差し——

私のことを、私だけを見つめる、彼の眼差し……

「俺、緋菜子さんの時以上に、もっともつと、おめのこと、好きになるからさ。だから、おめも……」

「木村……クン……」

こらえきれずに、千佳は泣きくずれた。

ぬぐつても、ぬぐつても、涙が止まらなかった。

理由なんかどうでもいい。木村クンは言ってくれた。

好きって、初めて——

その言葉が、どれだけ私の心に響いたか。

どれだけ私に勇気を与えてくれるか——

ああ、こんな私にも、心から安らげる居場所があったんだ——
初めて、そう思えた。

誰からも得られなかったこの安らぎを抱いて、私はあなたと歩い

てゆきたい——そう願う。

「千佳」

初めて下の名前で呼ばれた——その甘く切ない体験。

「緋菜子さんよりも、何倍も何倍もキスして、たくさんたくさんエッチしてよ——」

拓夫の言葉が胸にトクンと響いた。

「変えてゆくんのだ。二人の関係を……」

「あつ……」

気がつくと、二人はやわらかい草の褥じゅうで抱き合っていた。

千佳——

彼女を求める拓夫の心が、伝わってくるようだった。

そんな二人を、外灯の明かりがほのかに照らし出す。

「カラダ……いいだな？」

地面に横たえた千佳の顔を覗き込むようにして、拓夫が訊ねる。

千佳は目を閉じたまま、力強く首を縦に振った。

「私、変わりたいの」

千佳は閉じていた両目を開け、ハッキリと拓夫に伝えた。

「もっと積極的な女に——私はなりたいの」

「千佳……！」

拓夫は荒々しく千佳を掻き抱いた。

怖くなかったといえばウソになる。

不安がなかったといえばウソになる。

でも、これは私が本当の自分に生まれ変わるための儀式。

私は今、すべてをさらけ出し、好きな人の前に立つ。

もう、迷わない。

誰にも邪魔なんてさせない。そう自分にさえも——

ずっと目を背け続けてきた自分のカラダ、隠し続けてきた本当の

心——

それを隠したまま、逃げ続けることなんてできない——そう思った。

解き放たれてゆく自分——その感覚が確かにあった。
すべてを知られる快感、もう何も隠さなくていい——

ああ、何もかもが一つになって、まるで自分が世界へと溶け出し
てゆくような——

私はもう、何も怖れない。

怖れなくていいんだ。

私はここにいていい。

生きていてもいいのだと——

夜の高島城公園に、ひととき高く歓びの音が響いた。

私は泣いていた。

泣きながら絶頂に達していた。

心の牢獄から救われた瞬間だった。

木村クン、あなたが私を救い出してくれたの——

冴えわたる月だけが、そんな二人をはるか空からそっと見おろし
ていた。

第26話 終

第26話 生まれ変わる私（後書き）

生まれ変わる自分。それを体に刻み込むようにして、初めての……次回、最終話。でも、最終話の次にもう一回だけ連載が続きますので、終わりだと思ってやめないで下さいね>（―――）<

私の連載って、いつもそういう決まりなんです、ごめんなさいm（―――）m

【りさこのお知らせ】

バンダナの大学編「恋ひな2」は「あるピアノ少年の恋。」という真面目なタイトルに変更になりました>（―――）<

とりあえず、お知らせしときますね

最終話 希望の季節（前書き）

いよいよ最終話。でも、あともう一回だけ連載が続くので、まだ終わりじゃないんです、ごめんなさいm（――）m
あと、「あるピアノ少年の恋。」って、この小説の続編だったこと、知ってました？

最終話 希望の季節

ハア、ボクはなんでこんな大学にいるんだか……？

今を時と咲き誇る満開の桜を見つめながら、思わずため息をつくボク。

小口さんとバンダナがあんなことになったせいで、受験勉強が手につかず、けつきよく合格^{うか}したのは、上諏訪^{かみすわ}大の医学部だけ――

ハア、こんな中途半端な医学部なんて、旧帝大その他からあぶれた人たちの憩いの場だってゆーのに……。

ま、いいだ。

ここで一年、みっちり勉強して、来年は名大^{めいだい}医学部あたりに転学して……

「よ、メガネ。おめ、サークル、もう決めただか？」

ハア、またこの人と一緒の大学生活つて、一体どーして……
ボクは恨めしそうにバンダナを振り返った。

「おっはぴょん、浜くん」

それに、のっけからテンション全開のこの女子学生――

ハア、頭痛の種がバンダナ一人から二人に増えちゃっただよ。

「お、小口さん、なんかまた一段と派手になっただねえ……誰かと思っただよ」

「そう？ 浜くんこそ、もつとはじけなお？ ほらあ」

楽しそうにボクの手を振り回す小口さん。てか、この人だれえ！？
ゆさゆさと揺れるタンクトップの下のふくらみをチラ見しながら、
ボクは泣きたい気分にかられていた。

ああ、ボクの中での女の子像がくずれてゆく……

それもこれも、このバカなバンダナの悪影響のせいだ！

「にしても、浜くん、もつといい大学いくと思ってたのに」

小口さんがボクの顔を横から覗き込む。

「え、まあ、ボクの場合、頭脳は大学を選ばないということを実証するために……」

「ま、医者さえなれば、どこでもいいだぞ、よかったな、メガネ」
「ハア、何がいいんだ、バンダナよ……」

「それでよ、メガネ」

バンダナはボクの肩に手を回して言った。

「今日、さっそく合コンとかセッティングしてあるですよ、おめも来るだぞ？」

「は、はあ？ 合コン！？」

「そうだよ、浜くん。来なよ、合コン」

小口さんがボクに身を寄せる。

やわらかい胸の感触が腕に心地いい。

「そしたら、浜くんの彼女と、夢の4P^{シビ}プレイ、するだよーっつ！」

「えっ、ええーっつ！？」

「おう、そうただぞ、メガネ。おめも彼女とか作ってよォー」

ボクは思わず身を離れた。

「ボ、ボクはふつうでいいからあーっ！」

「なんだ、つまんねえ奴だな」

「そうだよ。みんなでしょうよ」

いいから、ボクのことはほっというて——！！

花見仕度の人の群れ、心の底から浮かれてくる希望の季節——

高原をわたる風に、湖面のさざ波がきらめいた。

長い冬が終わり、季節はもう春——

芽吹き始めた新たな命が、新緑の季節の訪れを告げていた。

了

あ……まだ次回がありますから、見捨てないで下さいね（；；）
ー（；；）

最終話 希望の季節（後書き）

新たな旅立ちの幕開け——— 少しでも先行きに不安を感じるメガネ
くんでした

さて、次回もちょっとだけ恒例のお話がありますので、お立ち寄り
くださいね>（―――）<

りさこからあなたへ

こんにちは

最後まで読んでいただいた方、本当にありがとうございました>

(――)<

この『恋するひな子先生』というお話の原作は、七年前に描いた
いいかげんな漫画なんです。なので、どことなく漫画的な雰囲気
を感じられた方も多かったのじゃないかと思います。

漫画や映画って、視点を一人称から三人称に自由に切り替えられ
るところがとても便利だと思うんです。小説でそれをやると、たい
がい怒られるのだけれど、「試しにやってみたらどうなのだろう」
と思い立ち、実験的に導入してみました。形式的にはあまり美しく
ないのかも……とは思いましたけれど、言いたいことを短時間で簡
単に伝えることができるので、書く側としては、ずいぶんと労力を
カットすることができました。

私の本職は紙媒体的な心理小説なので、三人称に擬似独白体を併
用して、全体をあくまで客観的な形式にまとめる技術はいくらでも
あると思うんです。けれど、あえてスタイルをくずして流してみた
のですけれど、慣れてしまうと違和感のない自分が怖い……(――
――)

あえて記述も簡潔にして、さらっと読めるように作ってみたので
すけれど、逆にパソコンからアクセスされている世代の方には物足
りなく感じられたかも知れないですね。携帯世代の方のほうがリピ
ートしているようでした(あれあれ)。

話は変わりますけれど、私は^{ひなこ}緋菜子が大好きなんです。一時期の
私の性格がそのまま出ていて、なんとなく愛着を感じます(よほど
ベタな性格なんでしょうね、私って)。お話自体はベタベタに古典
的な「恋ひな」ですけど、わかりやすくてよかったのじゃないか

と個人的には思っています。ちょっと冒険が足りなかったかな、と反省しきりなのだけれど、構成の形式美を考えると、これはベタに終わらせなくては……と逆に思ってみたり。高校生活の具体的記述がなかったのが残念な点だけれど、書きたいことだけそのまま書けたので、とりあえずよしとしておきますね（^ー^）

バンダナの大学編は『あるピアノ少年の恋。』というタイトルで連載中です。こちらは大学の行事がたくさん出てくるので、生活背景に萌える方向けです。よければ、どうぞご覧になってくださいね
> (――) <

恐怖のプライド女・小口緋菜子のあまりに切ない高校時代の物語は『ガラスのヴァイオリン』というタイトルで書こうと思っていた。ほとんど私のいじけた高校生活そのものという感じの恋愛小説になってしまいそう（：|；） ある意味、恋愛小説としては極めて真面目なのかも、と思わないでもないけれど……。『恋ひな』は、たまに不真面目でしたからm(――)m コメディとしても恋愛としても中途半端で、両方の読者の方を裏切ってしまいました（T T）

では、私のその他の作品、ご紹介しておきますね ミ

『 エステル・アシケナージのおうち 』

12歳の天才美少女・エステルをめぐる謎を推理する、28歳の特任教授みらの先生（処女・独身）のサスペンスです
もとは仲良しの女子中学生のために書いたお話です。

『 あるピアノ少年の恋。 』（R・15）

ヴァーンフリート国際ピアノコンクレンツをめぐる天才ピアノ少年の栄光と挫折。

ダメ男のユウとミスコン優勝者・舞の格差恋愛の行方は……？
バンダナ木村くんの続編です

あとはR・18の心理小説なので、紹介は控えさせていただきますね>(――)<

なお、来春に上梓する予定の紙小説は、きわめてまともな文体なのだけど、それでも内容はまったく私そのものなので、そこらで見かけたら、ぜひどうぞ　シ　危ない心理捜査官、危ない女子高生、危ない修道女、危ない公安警察官、危ない左翼芸術家、危ない猟奇犯罪者が登場する、危ないスリラーですけど……。そこかしこが、またしても私の半生なんですよ……(；|：)　ハア、キレてる。

それでは、またどこかでお会いしましょうね

私もみなさんの作品、読みにいきますから、気軽に誘ってください(*^　^*)ノ

では、短い間でしたけれど、どうもありがとうございました>(――)<

有坂　りさこ

08/10/30

りさこからあなたへ（後書き）

これで高校編はおしまいです　よければ大学編『あるピアノ少年の恋。』へどうぞ>（――）<
最後までおつきあいいただき、嬉しく思います。ありがとうございました>（――）<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2034f/>

恋するひな子先生

2010年10月8日13時21分発行